千葉県立中央博物館
収蔵資料解説書

民俗学の父
柳田國男

―本から読み解く暮らしへのまなざし―

千葉県立中央博物館
NATURAL HISTORY MUSEUM AND INSTITUTE, CHIBA

本書の刊行にあたって

人々の間で受け継がれてきた生活の技術や知識、家同士のつながり。その変遷を明らかにするのが民俗学です。

そのための研究手法を編み出して実践し、その後の日本民俗学の基礎を築いたのが柳田國男であり、令和７年（2025）、生誕から150年を迎えました。

彼はなぜ民衆の暮らしに関心を持ち、どのようにそれを解明しようとしたのでしょう。

本書では、令和５年（2023）に当館へ寄贈頂いた柳田國男著作の初版本コレクション（平野亥一コレクション）を用いながらそのまなざしと歩みをたどるとともに、利根川のほとりで少年期を過ごした柳田と千葉県とのかかわりについてもご紹介します。また、新たに発見された柳田國男の直筆原稿やメモ類も取り上げています。

異なる文化にふれるとともに、自分を取りまく文化をかえりみる。本書を通して、柳田國男や民俗学へ関心を持っていただければ幸いです。

令和８年３月
千葉県立中央博物館

目次

平野亥一コレクション・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
柳田國男とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第１章　幼少期の好奇心・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第２章　「民の暮らし」への まなざし・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第３章　あつめて　くらべる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第４章　こどもたちのことば・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第５章　書籍を彩った人々―装幀・挿画・題字―・・・・・・・・・・・・・20
第６章　柳田國男と千葉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
第７章　生きものへのまなざし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
新収蔵資料　柳田國男直筆原稿・メモ・・・・・・・・・・・・・・・・・・38

【凡例】
・本書の執筆と編集は玉井里奈（展示課）が担当し、柳田國男関連地図は榎美香（前：資料管理課）が作図した。
・本書は令和７年度トピックス展「民俗学の父・柳田國男－本から読み解く 暮らしへのまなざし－」（会期：令和７年４月15日～６月15日）の内容及びその後の資料調査の結果を基にしている。なお展示資料一覧を巻末に付した。
・展示担当（令和７年度）
玉井 里奈（展示課）、丸山 啓志（展示課）、黒田 篤史（地域連携課）、
奈良場 春輝（資料管理課）
尾崎 煙雄（教育普及課）、小田谷 嘉弥（展示課）、後藤 亮（企画調整課）
小林 大純（分館海の博物館）、照屋 清之介（分館海の博物館）
西内 李佳（展示課）

平野亥一コレクション

東京帝国大学の法学部を卒業後、文学部に入り直し演劇史や能面の研究を行っていた平野亥一（1899～1977）は、美術史学科の助手であったときに植物学者の白井光太郎（1863～1932）より、柳田國男著『後狩詞記』『遠野物語』を譲られました。この２冊には、親交のある白井にあてた、柳田による献呈署名が記されています。

亥一は柳田の仕事にかねてより強い関心を持っていたことから、これをきっかけとして柳田の著書を熱心に蒐集するようになりました。

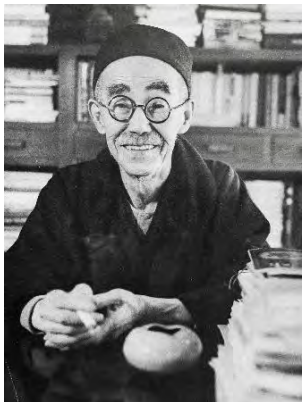
戦後、国際文化振興会（現 国際交流基金）の研究職員として日本の芸術や文化を海外に紹介する業務を行いながら、専門分野の関連書物を蒐集しました。なかでも柳田國男の研究業績に関心を寄せて初版での購入を続け、当コレクションを成立させました。令和５年（2023）、ご子息の平野綏氏よりこれらのコレクションすなわち柳田著書および関係書籍 193 点をご寄贈頂きました。

柳田國男は、出版された本に加筆修正案を書き込み改訂版の出版に生かしていました。書籍によっては改訂にあたり大きな加筆修正が加えられたものもあるため、初版と改訂版を読み比べることで、柳田の思索の変化などを確かめることができます。

柳田國男とは

明治８年(1875)7 月 31 日、兵庫県神崎郡福崎町の松岡家に六男として生まれ、12 歳で長兄を頼り茨城県利根町布川に転居、利根川のほとりで幼少期を過ごしました。農商務省・法制局参事官・貴族院書記官長という官僚時代を経て朝日新聞社に勤務、国連委任統治委員も務めていました。官僚時代の視察、外遊、朝日新聞記者としての旅行、様々な文化人・研究者などとの交流を通じて得た経験や調査をもとに、文字による記録だけでは分からない、口伝えや行動で伝承される民衆の歴史を解明するために「郷土研究」を提唱、のちに日本民俗学と呼ばれる学問の基礎を築きました。

これらの功績により、昭和 26 年（1951)に文化勲章を受章。昭和 37 年(1962) 8 月 8 日、88 歳でその生涯を閉じました。



86 歳の柳田國男
昭和 36 年(1961)12 月
写真提供：利根町立歴史民俗資料館

※出生時の名前は松岡國男で、明治 34 年(1901)に柳田家の養子として入籍し柳田姓となりました。本書では、幼少期や松岡兄弟の話題においては「國男」、それ以外では改姓前でも「柳田」と表記しています。

第１章　幼少期の好奇心

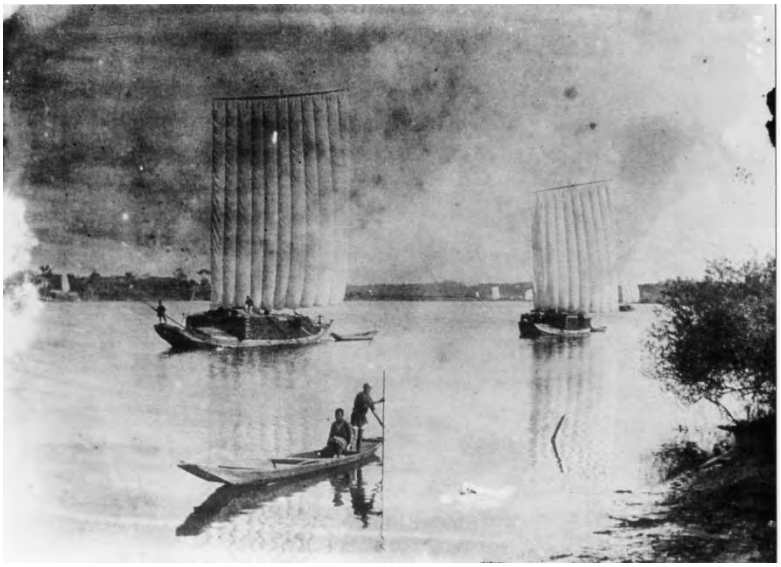
兵庫県神崎郡福崎町辻川で生まれ、8 歳の時に母の実家のある加西郡北条町に移り住んだ國男は、10 歳で父の友人である三木家に預けられました。辻川の旧家だったこの家には和漢の書籍のほか草双紙類など様々な書籍があり、それを一心不乱に読んだ國男は、のちに「雑学風の基礎はこの一年ばかりの間に形造られたように思う」と当時を振り返っています。

明治 20 年（1887）8 月末、茨城県北相馬郡布川町で医院を開業していた松岡家長男の鼎のもとに國男は移り住みます。身体が弱いからと学校には通わずそこらじゅうをとびまわっては目に映るもの触れるものを通して新しい経験を重ねつつ、布川の小川家や次兄の通泰が送ってくれた書籍を読みふける日々を過ごしました。

そのなかで目にした徳満寺の「間引き絵馬」は、幼い國男少年の心に深い印象を残します。北条町と布川とで触れた、飢えと貧しさによって起こる出来事は、のちに農商務省で働き、さらには民俗学を探求した彼の基層となっていたのかもしれません。

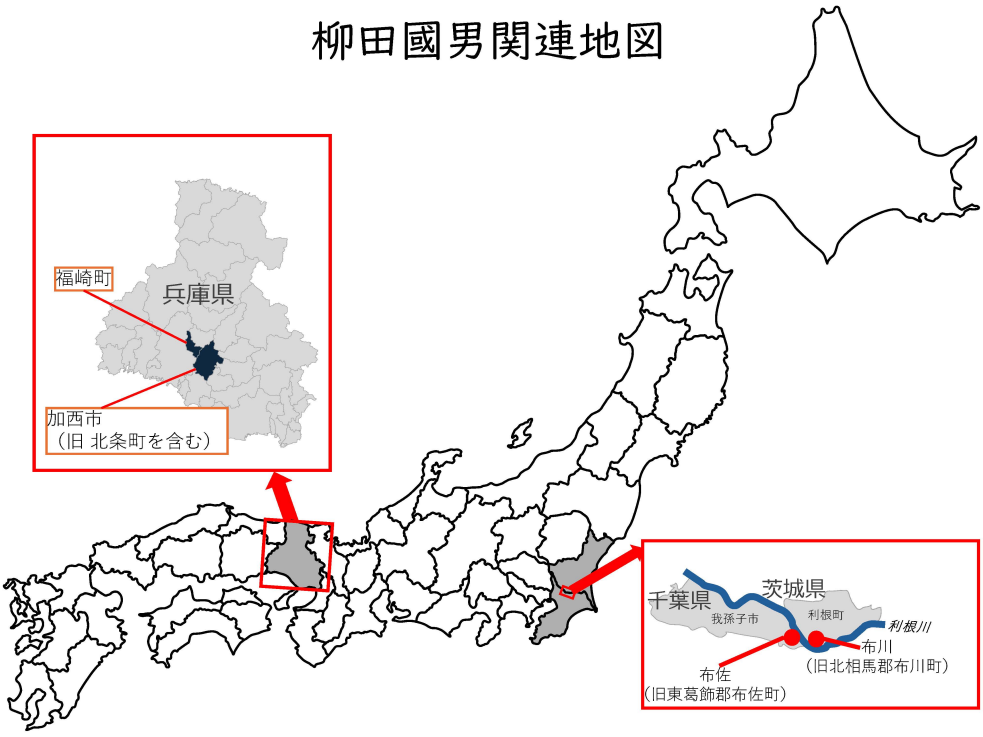
松岡兄弟
（布川の徳満寺境内にて）
明治 22 年(1889)11 月 29 日
写真提供：利根町立歴史民俗資料館
松岡兄弟（左より輝夫、國男、静雄）と車夫の伊藤傳作。國男は当時 12 歳。

13 歳の松岡國男
明治 21 年(1888)5 月
写真提供：利根町立歴史民俗資料館



利根川をいく高瀬船
明治時代
原資料所蔵：齋藤家、写真提供：我孫子市教育委員会
脚舟という小さな舟を曳航している高瀬船。布佐にある栄橋（昭和 46 年(1971)架橋）付近の堤から下流を撮影した写真である。

間引き絵馬
年代不明
原資料所蔵：徳満寺、写真提供：利根町立歴史民俗資料館
生後間もない赤子を殺そうとする女性が描かれており、飢饉等による子殺しを戒めるためのものと考えられる。柳田がこの絵馬を目にした時、絵馬は徳満寺の地蔵堂軒下に飾られていた。右上に描かれていた地蔵菩薩は、その後劣化により剥落。



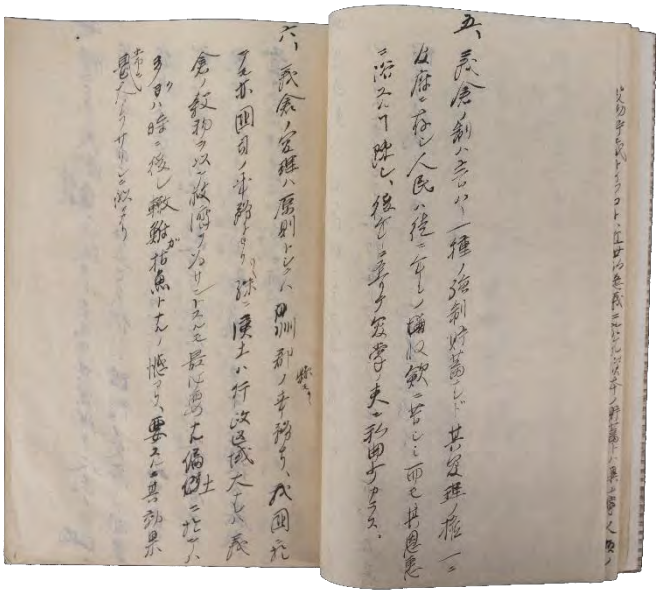
第２章　「民の暮らし」へのまなざし

官僚時代の松岡國男
明治 44 年(1911)頃
写真提供：利根町立歴史民俗資料館

青年期の柳田は森鴎外や島崎藤村らと親交をもち、田山花袋や国木田独歩と共に詩集を出版し、また文学雑誌にも投稿する文学青年でもありました。作家の水野葉舟はのちに自身が編んだアンソロジーに柳田の詩を多く掲載し高く評価しています。

東京帝国大学へ入学し農政学を学んだ柳田が卒業論文のテーマに選んだのは、災害や飢饉に備えて設けられた「三倉」でした。明治 33 年（1900）に農商務省へ就職すると、産業組合の啓発普及のための講演や視察で全国を旅するようになります。1 年半で法制局へ異動となった後も全国農事会や報徳会、大日本産業組合中央会といった民間団体を通じて農政と関わり続けました。大正 8 年（1919）に官僚の職を辞した後は朝日新聞社員となり東北や中部地方、関西、瀬戸内、九州、沖縄など各地を旅行しては朝日新聞に紀行文を連載しました。並行して国際連盟委任統治委員として大正 10 年（1921）から 2 年間海外赴任を経験しています。

このように、全国各地でどのような暮らしが営まれているかを知る機会を得ては、そこで見聞きしたことを書籍として出版するようになるのです。



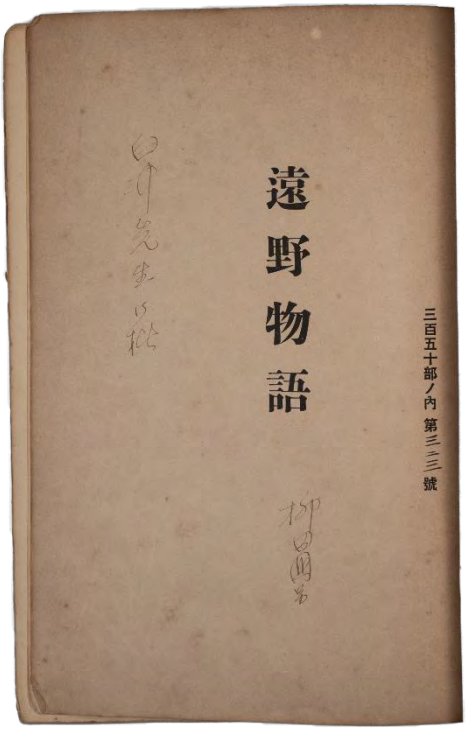
三倉沿革
明治 36 年(1903)
原資料所蔵：成城大学民俗学研究所
災害や飢饉に備えて設けられた「三倉」（義倉・社倉・常平倉）についての研究ノートで、唐や日本における飢饉対策を収集し三倉の役割について論じた。柳田は各地で農業政策に関する講演を行ったが、そのなかでこの三倉についても言及している。

『遠野物語』

明治 43 年(1910)6 月 14 日

当館蔵

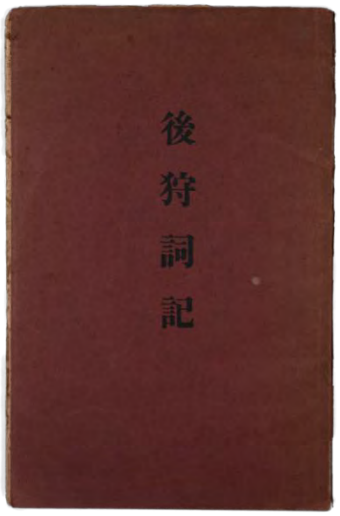
岩手県土淵村出身の学生・佐々木喜善が語った遠野に伝わる民話や民俗行事を柳田が聞き取りまとめたもの。本資料は限定 350 部のうち白井光太郎へ贈られた 323 冊目である。



『遠野物語』標題紙　柳田國男サイン

明治時代

当館蔵

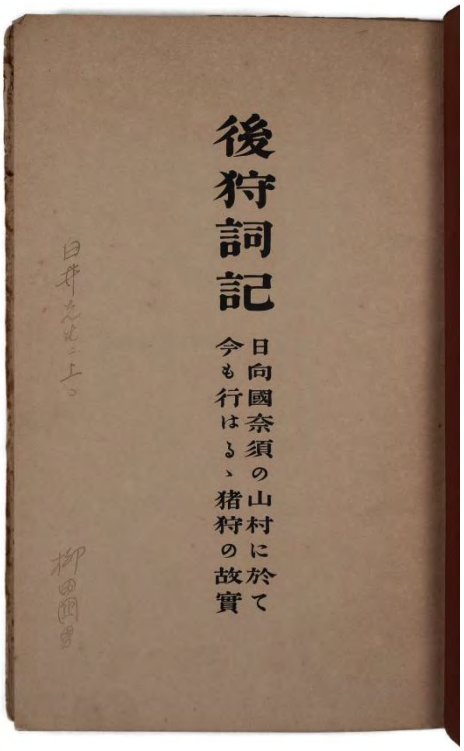


『後狩詞記』

明治 42 年(1909)3 月 15 日

当館蔵

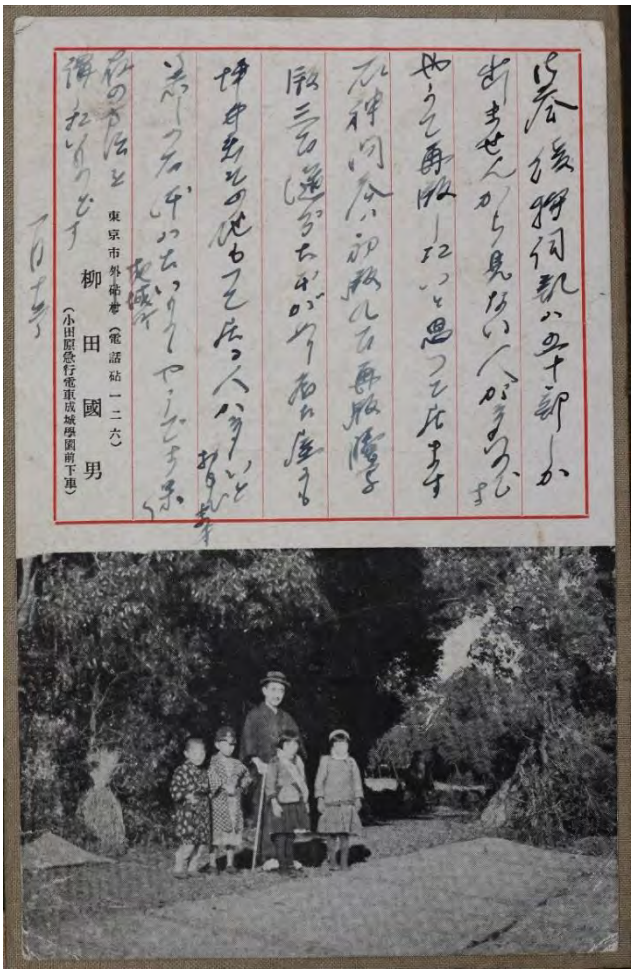
明治 41 年(1908)、柳田は四国・九州旅行の中で宮崎県椎葉村を訪れ、猪狩に関する作法やことば、伝承などを調査した。本書にはその情報と、椎葉　徳蔵の家にあった「狩之巻」が収録されている。 本資料は限定 50 部のうち白井光太郎へ贈られたものである。



『後狩詞記』標題紙　柳田國男サイン

明治時代

当館蔵



『後狩詞記』葉書
年代不明
原資料所蔵：成城大学民俗学研究所
柳田が松尾禎三に宛てた葉書です。『後狩詞記』は50部しか出版しなかったため読んでいない人が多く、再版したいと思っている、と書かれている。

『石神問答』
明治 43 年(1910)5 月 20 日
当館蔵
シャグジと呼ばれる石神に関して研究者たちと意見交換した書簡（手紙）が収録されている。なお、『後狩詞記』、『石神問答』、『遠野物語』は、柳田による民俗学初期の三部作とも呼ばれている。

遠野物語

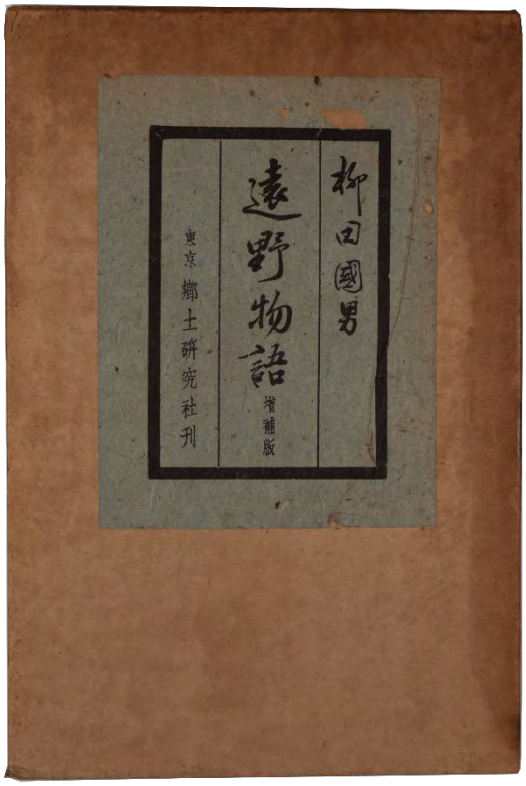
明治 43 年（1910）に出版された『遠野物語』には、岩手県遠野地方に伝わる昔話や伝説などが収録されています。河童やザシキワラシが登場するちょっと怖くて不思議な話のほか、小正月をはじめとした年中行事なども記されています。これらを柳田に語り聞かせたのが土淵村（現在の遠野市土淵）出身の佐々木喜善（佐々木鏡石）でした。

早稲田大学生だった喜善を、友人で作家の水野葉舟が柳田へ引き合わせたことで交流が始まり、柳田は喜善から数度にわたり聞き取りを行ってはそれを書き留め、遠野訪問を経て『遠野物語』を世に送り出しました。本書は 350 部が自費出版され、第 1 号が喜善へ献呈されています。

『遠野物語』の復刻に先んじて、未掲載の話を佐々木喜善が『聴耳草紙』で出版していたため、柳田はこの二冊のどちらにも載っていない話を『遠野物語拾遺』としてまとめ、『遠野物語（増補版）』に収録しました。しかし増補版が出版されたとき喜善はすでに亡くなっており、柳田は「終に佐々木君の生前に、もう一度悦ばせることが出来なかったのは遺憾である」と増補版序文に記しています。

絵はがき　遠野町全景
明治 44 年(1911)
写真提供:遠野市立博物館

佐々木喜善、水野葉舟ほか集合写真
年代不明
写真提供：遠野市立博物館
佐々木喜善は前列左、水野葉舟は後列右の人物。
二人は東京市小石川区（現在の東京都文京区）にあった同じ下宿で暮らしていたことで交流が始まった。



『遠野物語　増補版』
昭和 10 年(1935)7 月 31 日
当館蔵
『遠野物語』の復刻に先んじて、本書未掲載の話を佐々木喜善が『聴耳草紙』で出版していた。柳田は、この二冊のどちらにも載っていない話を『遠野物語拾遺』としてまとめて、この増補版に収録した。

『遠野物語』初版と増補版の比較

書名	遠野物語　※初版	遠野物語（増補版）
発行年月日	明治 43 年（1910）6 月 14 日	昭和 10 年（1935）7 月 31 日
発行所（発売所）	聚精堂	郷土研究社
定価	50 銭	3 円
寸法	23.5×16.0	23.4×15.5
備考	標題紙に柳田サイン「白井先生御批柳田國男」あり	附：批評紹介集録 題僉：金田一京助

『遠野物語』初版と増補版の構成

遠野物語	遠野物語（増補版）
標題紙 「白井先生御批　柳田國男」	標題紙
	刊本遠野物語表紙と稿本遠野物語表紙
	刊本遠野物語原稿
	稿本遠野物語　十五丁裏
	稿本遠野物語　十六丁表
	稿本遠野物語　四十二丁裏
	稿本遠野物語　四十一丁表
	遠野郷略図　故佐々木喜善氏作
此書を外國に在る人々に呈す	此書を外國に在る人々に呈す
	増補版目次
	再版覚書
	遠野物語題目
	遠野物語拾遺題目
（序文）此話はすべて遠野の人佐々木鏡石君から聞きたり。（後略）	（序文）此話はすべて遠野の人佐々木鏡石君から聞きたり。（後略）
題目	
（遠野物語本文）	（遠野物語本文）
	（遠野物語拾遺本文）
	索引
	遠野郷本書関係略図
柳田國男近業	
奥付	奥付

※対応する内容をとなりあう行に入れています。

第３章　あつめて　くらべる

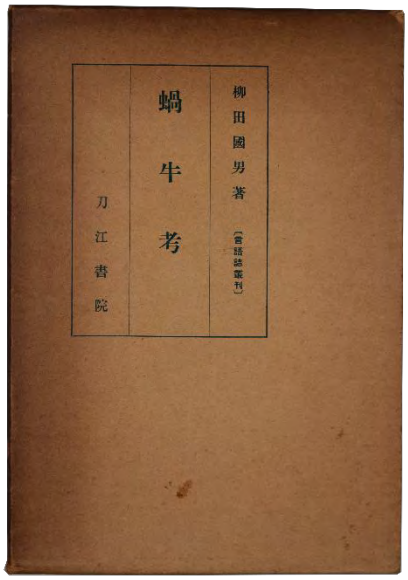
柳田はどのような方法で暮らしの実態を調査していたのでしょうか。①現地での観察や聞き取り、②調査票や雑誌『郷土研究』『民族』『民間伝承』、手紙などを用いた情報収集、③論文、報告書、郷土誌等の文献調査、の３つに大きく分けられます。

①の現地調査は柳田自身の旅行によるものもあれば、調査ノートをほかの研究者に持たせて現地へ赴かせ、その結果を柳田が考察するという方法をとることもありました。その大きな成果が「山村調査」や「海村調査」「離島調査」です。調査者は、質問項目が印刷された「採集手帖」を与えられ、それに沿って現地の人々から聞き取りを行うという調査方法でした。項目から大きく外れた調査はしにくいものの、同時期に共通する質問のもと各地で情報収集がなされたという点で意義ある調査でした。これら調査の報告書は、調査項目に沿ったトピックについて各地の事例が比較されています。

古文書など文字で残された記録から過去を探る歴史学に対して、柳田は文字記録以外の形で伝承されてきたこと、例えば道具や行動、ことばとその意味などを調査しました。それは人々の間で時に変化しながら伝承されてきたものごとであり、生活の実態や、ひいては生活の目的という観念的なものを解明しようとしていました。

『民間伝承論』
昭和９年(1934)８月25日
当館蔵
民間伝承の研究(民俗学)の目的やその方法が記された概論書。序と第一章は柳田の自筆、以降は柳田が「民間伝承の会」で行った講義録である。

『郷土生活の研究法』
昭和10年(1935)８月18日
当館蔵
郷土研究(民俗学)に関する柳田國男の講義録で内容は『民間伝承論』と重なるが、こちらは入門書としてよりわかりやすい表現で書かれている。



『蝸牛考』
昭和 5 年(1930)7 月 10 日
当館蔵
日本各地の蝸牛(かたつむり)の呼称を調査し分類したところ、類似する呼称がおおよそ同心円状に分布していることを示した。

『蝸牛考』
昭和 18 年(1943)2 月 25 日
当館蔵
昭和 5 年(1930)に刊行された『蝸牛考』の改訂版。

附 蝸牛異称分布図
昭和 5 年 7 月 10 日刊行の刀江書院版『蝸牛考』に収録された図。昭和 18 年 2 月 25 日創元社より刊行の改訂版では削除されている。

『蝸牛考』初版と改訂版の比較

書名	蝸牛考　※初版	蝸牛考（創元選書 104）
発行年月日	昭和 5 年（1930）7 月 10 日	昭和 18 年（1943）2 月 25 日
発行所（発売所）	刀江書院	創元社
定価	1 円 80 銭	1 円 60 銭
寸法	19.1×13.2	18.6×13.5

『蝸牛考』初版と改訂版の構成

蝸牛考	蝸牛考（創元選書 104）
標題紙	標題紙
なし	改訂版の序
小序（昭和 5 年 6 月）	初版序
目次	目次
（本文）	（本文）
蝸牛異名索引 （序文） 呼称・地域・掲載ページ （呼称の五十音順に配列） 蝸牛異称分布図索引 　（呼称が列記されており、分布 　図と対照するようになっている） 黒色　デデムシ系 茶色　マイマイ系 赤色　カタツムリ系 青色　ツブリ系 緑色　ナメクジ系	蝸牛異名分布表 ※はしがき（昭和 17 年 10 月） 一　デデムシ・デンデンムシ系 　呼称・地域 　（呼称の系統ごとに配列、以下同じ） 二　マイマイツブロ系 三　カタツムリ系 四　ツブラ・ツグラメ系 五　蛞蝓同名系 六　蜷同名系 七　新命名かと思はるゝもの 八　系統明かならぬもの （説明）
附　蝸牛異称分布図	なし
「言語誌叢刊」発刊趣旨（昭和五年六月、藤岡勝二・新村出・柳田國男）	なし
奥付	奥付

※対応する内容をとなりあう行に入れています。
※改訂版の「蝸牛異名分布表」は、初版「蝸牛異名索引」と「蝸牛異称分布図索引」を統合・再編したような内容です。

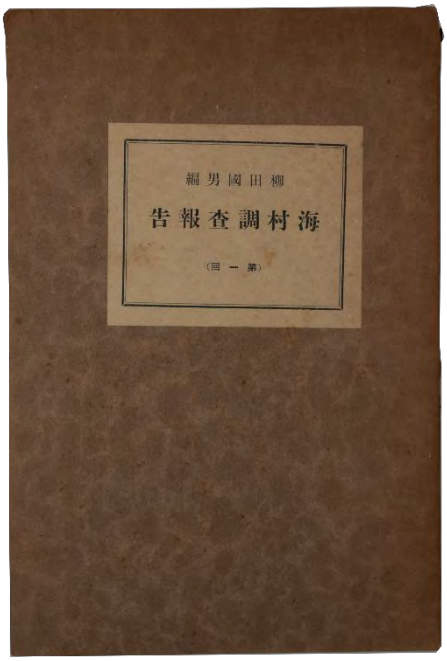
山村調査・海村調査・離島調査

「日本僻陬諸村に於ける郷党生活の資料蒐集調査」、通称「山村調査」は、昭和９年（1934）５月から昭和 12 年（1937）４月にかけて行われました。調査地として「一府縣一箇所以上、互ひに若干の距離を有して隔離され、且つ比較的交通機関に恵まれず、所謂世間との往来の制限せられたる村落、然も従来生活調査の未だ試みられざる山村」が選ばれました。用いられたのは、百項目の質問が記され、“採集手帖”と名付けられた調査ノートです。この手帳は、調査を経るごとに改訂が施され、質問項目の割り付けなどが変更されました。なお、「離島及び沿海諸村に於ける郷党生活の調査資料蒐集」、通称「海村調査」は昭和 12 年（1937）から２年間、離島調査は昭和 25 年（1950）から 27 年（1952）まで行われています。

これら調査の成果は『山村生活の研究』（1937）、『海村生活の研究』（1938）、『離島生活の研究』（1966）などの書籍で世に送り出されました。

千葉県内の集落も対象地となっており、瀬川清子のほか大藤時彦が香取郡久賀村で昭和 11 年度（1936）に調査を行っています。

『山村生活の研究』
昭和 12 年(1937)6 月 10 日
当館蔵
昭和 9 年 5 月から同 12 年 4 月にかけて全国の山村約 50 箇所を調査した通称「山村調査」の結果をもとに刊行された報告集。



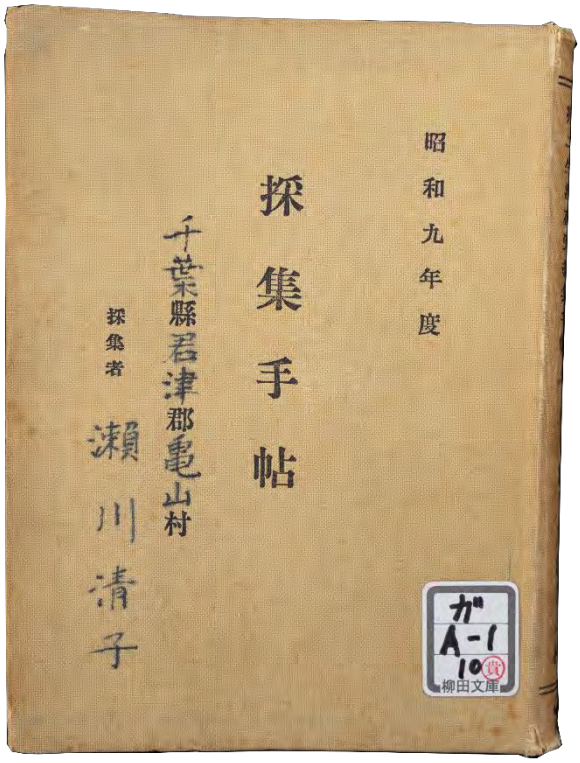
『海村調査報告（第一回）』
昭和 14 年(1939)8 月 15 日
当館蔵
海村調査の報告書。それぞれの調査地ごとに査者自身が関心を持ったことについて記されている。瀬川は「安房及び伊豆に於ける若者の生活」について執筆した。

瀬川清子が記した房総の民俗

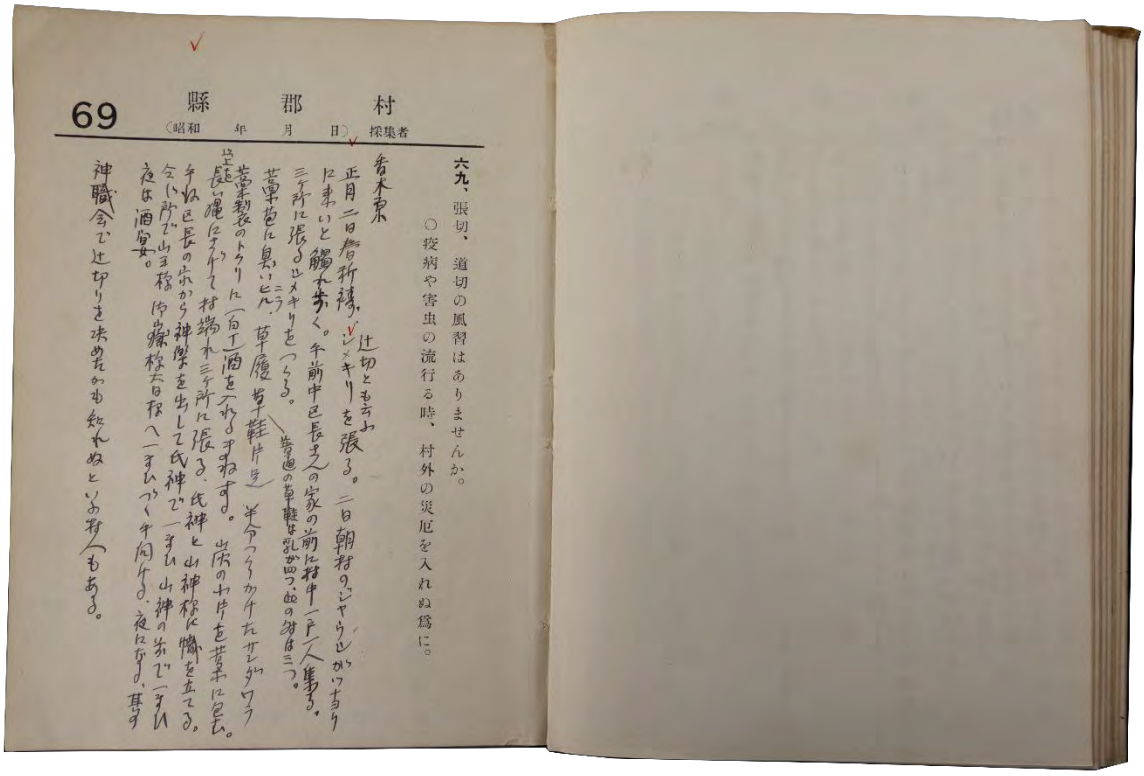
千葉県内で「山村調査」や「海村調査」を行った民俗学者の瀬川清子（1895～1984）。柳田に師事した瀬川は、その生涯において海女や婚姻など女性の生活史について広く調査研究を進めました。全国各地で調査を行い、また昭和12年（1937）に発足した日本民俗学講座婦人座談会では女性の民俗学者たちと議論を深めるなど、女性民俗学の第一人者として活動しました。

瀬川は「山村調査」において全国４調査地を、「海村調査」では14調査地を調査しました。千葉県内の調査地に限ると、「山村調査」では君津郡亀山村（現在の君津市）、「海村調査」では安房郡富崎村（現在の館山市）、千倉町、長尾村（現在の南房総市）、山武郡豊海村（現在の九十九里町）で調査を行っています。

初期木曜会のメンバーたち
昭和９年(1934)頃
写真提供：成城大学民俗学研究所
昭和８年(1933)９月から柳田は自宅で民間伝承論の講義を３か月にわたって行った。
毎週木曜日に開催されたことにちなみ翌年から「木曜会」として発足したその研究会には、のちに民俗学を担っていく若い研究者たちが参加していた。
「山村調査」「海村調査」で千葉県内を調査した瀬川清子は、後列右から三番目の人物。

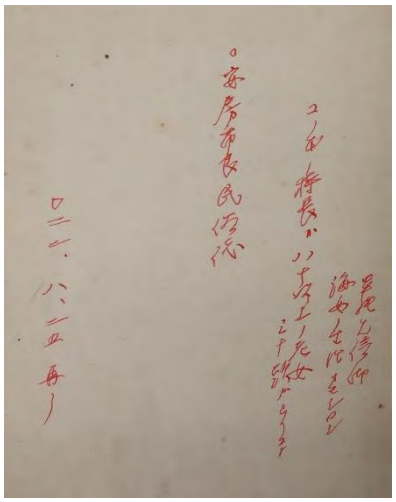


『郷土生活採集手帖』千葉縣君津郡亀山村
作成：瀬川清子
調査日：昭和９年(1934)８月10日～昭和10年(1935)１月４日
原資料所蔵：成城大学民俗学研究所
「山村調査」の亀山村調査において、瀬川清子が使用した採集手帖。海村調査で使われた手帖には目次（調査項目一覧）が掲載されているが、この山村調査用の手帖にはない。
君津郡亀山村は現在の君津市。

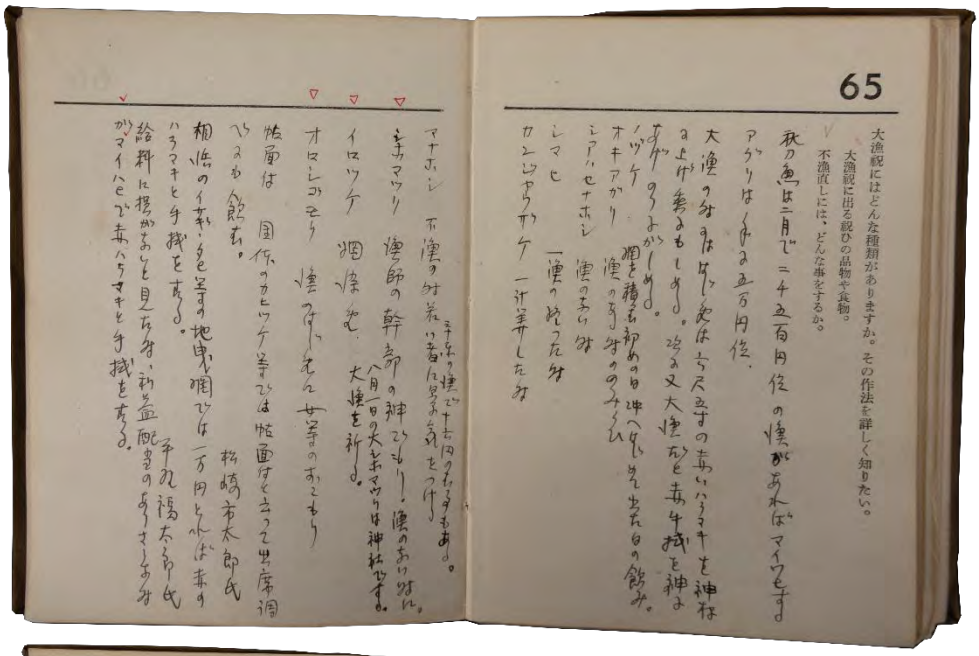

69　縣　郡　村
（昭和　年　月　日）　採集者

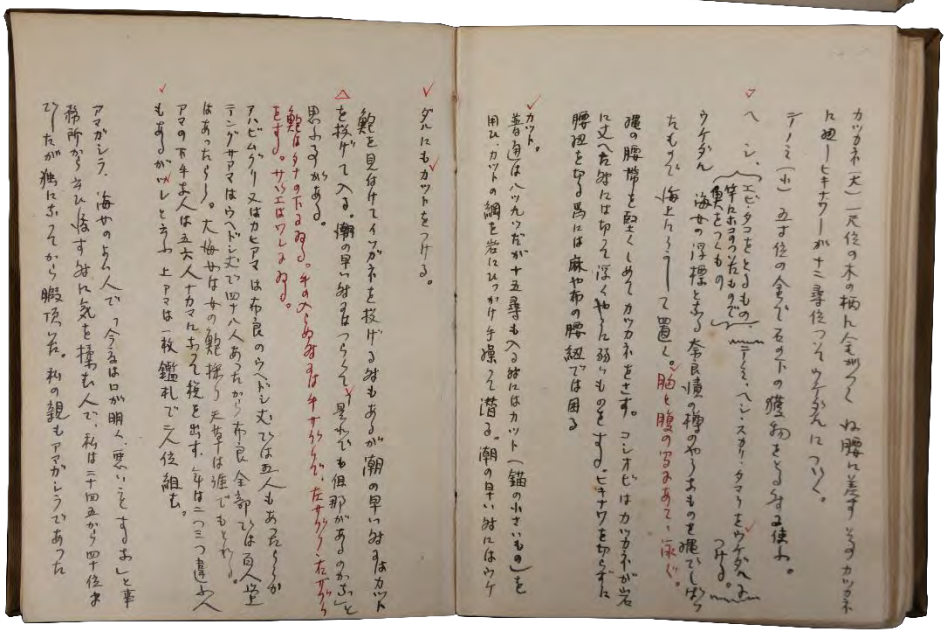
六九、張切、道切の風習はありませんか。
○疫病や害虫の流行る時、村外の災厄を入れぬ爲に。

香木原
正月二日春祈禱、辻切とも云ふ
ビキリを張る。二日朝村のジャウロからヨリに来いと觸れ歩く。午前中区長さんの家の前に村中一戸一人集る。三ケ所に張るビキリをつくる。普通の草鞋は乳が出つ、此の時は三つ。草履草鞋共
草履草鞋は臭いビ、草履草鞋共
藁製のトクリに（白丁）酒を入れる子ねます。出来のわけを藁に包む。
髮の毛を入れて村端れ三ケ所に張る。氏神と山神様に幟を立てる。
千松区長の家から神楽を出して氏神で一まい山神の所で一まい
今日所で山を祭り
夜は酒宴。
神職今で辻切りを決めたのも知れぬと云ふ者もある。



『採集手帖(沿海地方用)』千葉縣安房郡富崎村
作成:瀬川清子
調査日:昭和 12 年(1937)12 月 24 日～同年 12 月 28 日
原資料所蔵:成城大学民俗学研究所
「海村調査」において民俗学者の瀬川清子が使用した採集手帖の一部。調査者たちが持ち帰った手帖を、柳田はメモや記号をつけながら読んだ。手帖の扉には「海女の生活オモシロシ」という柳田のメモが書かれている。
安房郡富崎村は現在の館山市。





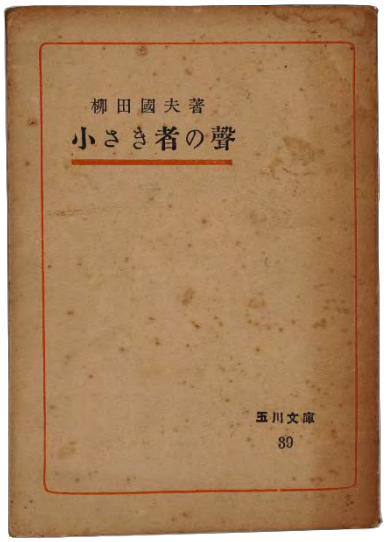
第４章　こどもたちのことば

柳田は、こどもの遊戯や言葉の中に、かつて大人が行っていた神事や生活の様子が残されていると考えていました。こどもが使う言葉に注目し、その成り立ちや多様さを探求したのです。その成果を『小さき者の聲』や『野草雑記』『野鳥雑記』『こども風土記』などで発表しました。

戦後になると、柳田はこどもの教育に力を入れるようになります。民主主義を支える「よき選挙民」を育成することを念頭に、話すことと同じように書く力、考える力を養う必要があるとして、国語科や社会科の教科書監修に尽力しました。

出版後、柳田は教科書の内容を検討しては赤字でコメントを書き込み、改訂を行っています。掲載した文章はその学年の知識で理解できるかなどを気にかけ、改訂で別の筆者の文章に入れ替えることもありました。

『こども風土記』
昭和 17 年(1942)2 月 27 日
当館蔵
朝日新聞での連載を書籍化したもので、こどもの遊びやこどもが関わる民俗行事などが紹介されている。こどもとその母親を想定読者として依頼されたが、文章が難しかったものあり年配者からの反響の方が大きかったという。



『小さき者の聲』
昭和 8 年(1933)4 月 5 日
当館蔵
こどもの使うことばや遊びについて考察した。内容は小学校の教員を読者と想定して書いたものが多いと柳田は後年記している。こどもの持つ感性やことばを大切にしてほしいという思いが、本書の背景にあったようである。

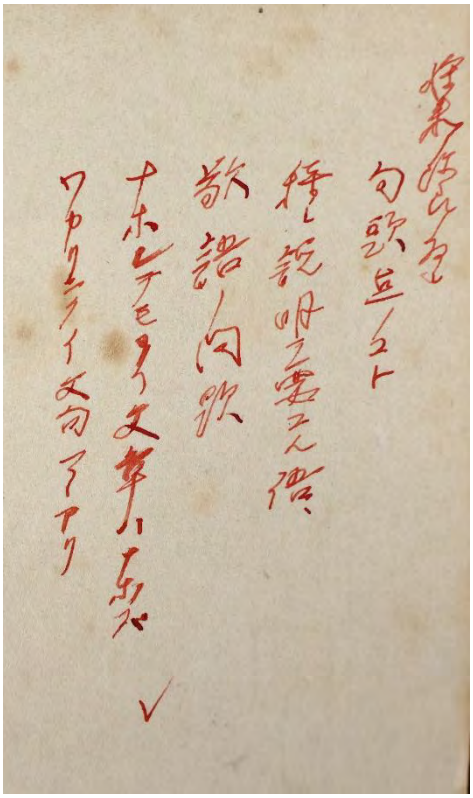
柳田國男の教科書

（1）国語教科書『新しい国語』（東京書籍）製作の過程

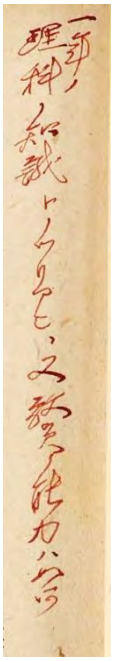
昭和23年（1948）5月15日	柳田國男、東京書籍の小中学校国語検定教科書作成の監修者となることを正式に受諾
昭和24年（1949）春	小学校国語教科書、中学校国語教科書（『あたらしいこくご』『新しい国語』）が完成
同年	教科書検定を受ける（小学校４年下巻、５年上巻、中学校３年が不合格）
昭和25年度（1950）	小学校１、２、３、６年国語教科書発行
同年	教科書検定を受け、小学校４年、５年、中学校３年合格
昭和26年度（1951）	小学校１～６年、中学校１～３年の国語教科書が揃う
昭和29年（1954）春	高校国語教科書完成
昭和30年度（1955）	東京書籍版高校国語教科書の使用が始まる
昭和35年（1960）	柳田國男、教科書の監修を辞す

（2）社会科教科書『日本の社会』（実業之日本社）製作の過程

昭和28年（1953）5月	小学生用社会科教科書『日本の社会』（２～６学年）完成
8月30日	文部省検定合格
昭和29年（1954）	中学生用社会科教科書『社会』文部省検定不合格 教科書としての使用なし
昭和38年（1963）	『日本の社会』発行停止



一年ノ
理科ノ知識トノツリアヒ、又教員ノ能力ハ如何



将来ノ改良ノ為ニ
句読点ノコト
特ニ説明ヲ要スル語
敬語ノ問題
ナホシテモヨイ文章ハナホス
ワカリニクイ文句マヽアリ

『新しい国語　中学一年上』への柳田國男の書き込み
年代不明
原資料所蔵：成城大学民俗学研究所

第５章　書籍を彩った人々―装幀・挿画・題字―

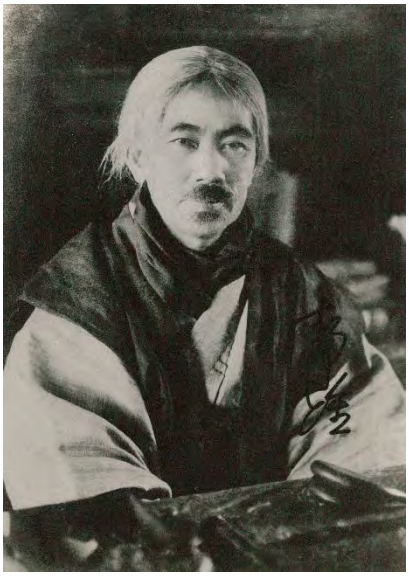
本を作るにあたって、装幀や挿絵、題字は欠かせないものです。柳田が携わった書籍において、これらを手がけた人物たちをご紹介します。

松岡 静雄、松岡 映丘
――『退読書歴』題箋・見返し

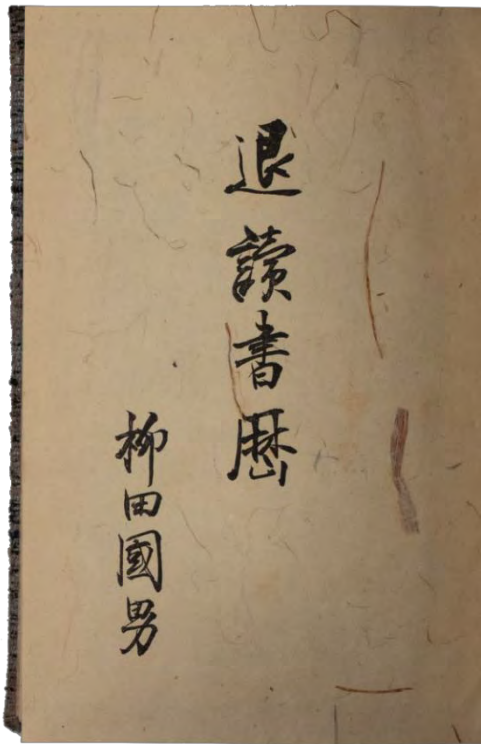
『退読書歴』の題箋と見返しの絵は、國男の希望により彼の二人の弟――松岡静雄（1878～1936）と松岡映丘（1881～1938）がそれぞれ手がけています。

書が上手だったという静雄には函に貼る題箋や扉に使われる標題「退読書歴」を頼み、画家の映丘には辻川の生家の絵を依頼しました。しかし四歳までしかこの家に住まなかった映丘は、人に尋ねたりして絵を仕上げたため「似ても似つかないものになってしまった」と柳田は『故郷七十年』で振り返っています。

なお、映丘という雅号は、本名の輝夫にちなんで兄の通泰が古い文学にある「丘に映る」ということばからつけたもので、「えいきゅう」と音読みされることは覚悟の上での名づけであったと『故郷七十年』には記されています。東京美術学校で日本画を学んだ映丘は、卒業後母校で学生を教えつつ、古典文学に着想を得た大和絵の制作や舞台美術の衣装考証などで活躍していきました。



松岡静雄（左）と松岡映丘（右）
写真提供：福崎町立柳田國男・松岡家記念館



『退読書歴』（左）函、（右）扉の標題
昭和８年(1933)７月20日
当館蔵
柳田國男の朝日新聞社退職記念として刊行されたもので、柳田が執筆した書評や序文が収録されている。書は弟の松岡静雄による。

松岡映丘「生家」
昭和８年(1933)頃
写真提供：福崎町立柳田國男・松岡家記念館

恩地 孝四郎

――『日本児童文庫』シリーズ装幀ほか

柳田國男が編者として携わった『日本神話傳説集』、『歌・俳句・諺』、『日本昔話集（上）』。これらを含む「日本児童文庫シリーズ」の装幀や表紙を手がけたのが恩地孝四郎（1891～1955）です。

恩地は東京美術学校で西洋画や彫刻を学ぶかたわら、明治44年（1911）から自宅に近い洛陽堂に出入りし、主人の河本亀之助のすすめで装幀を手がけるようになります。

昭和2年（1927）頃からは『明治大正文学全集』『世界文学全集』『近代劇全集』など全集の装幀を多く手がけるようになり　翌年刊行の『北原白秋全集』で装本家としての地位を確立。装幀の仕事のなかで挿絵を描くだけでなく、自身の版画作品を出品するなど精力的に創作活動を行いました。

『日本児童文庫』は、全70巻が異なる表紙絵で装幀されています。このことについて恩地は著書『本の美術』のなかで、「70巻全部別図を随分熱心にやったが、製版も三色で無理していて上乗ではなかった」と振り返っています。

『日本昔話集（上）』（左）装幀　恩地孝四郎、（右）挿絵　岡本歸一
昭和5年(1930)3月20日
当館蔵

岡本 歸一

――『日本昔話集（上)』挿絵

シリーズ日本児童文庫第 11 巻『日本昔話集（上)』の挿絵を手がけたのが童画家の岡本歸一（1888～1930）です。

兵庫県淡路島で生まれた岡本は東京第一中学校を卒業後、黒田清輝ら主宰の白馬会研究所で西洋画を学びました。のち、岸田劉生や木村荘八、高村光太郎らとフューザン会を立ち上げたほか、島村抱月が興した芸術座などで新劇の舞台美術も担当しています。童画家の道を歩むきっかけは、児童文学者の隣人・楠山正雄の紹介で外国文学シリーズ「模範家庭文庫」（冨山房）の挿絵を手がけたことでした。

その後、岡本は童話雑誌「金の船」（金の星社）や絵雑誌「コドモノクニ」（東京社）の二誌を主な仕事の場として活動することとなります。

どんなに小さな仕事も妥協せず仕上げ、また子どもと遊ぶのが好きだったという岡本歸一。その画風は写実的で、曲線の美しさが目を引きます。

石井 了介

――『日本神話傳説集』挿絵

シリーズ日本児童文庫第８巻『日本神話傳説集』の挿絵は日本画家で版画家の石井了介（1898～1984）によります。

熊本県の南関町に生まれた石井は京都絵画専門学校を経て 24 歳で東京美術学校日本画本科に入学し、結城素明や柳田の弟である松岡映丘に学んだほか、親戚の画家・山本鼎の紹介で平福百穂の画塾にも通いました。東京美術学校卒業後は山本鼎の日本農民美術研究所の仕事を手伝うようになり、山本らが進めた日本農民美術運動や児童自由画教育運動（※）の影響を次第に受けていきます。学校の図画副読本や、児童図書の挿絵を数多く手がけますがそれでも当時の生活は苦しく、また「挿絵をかくのは嫌いだった」と後に語っていたようで、画家として生きることの難しさに直面していたようです。

戦後、50 歳を過ぎた石井は日本画の傍ら木版画制作を精力的に行うようになり、86 歳で亡くなるまで北原白秋詩歌版画シリーズをはじめ数多くの木版画作品を発表しました。なお昭和７年（1932）９月、了介 34 歳の時に妻の転勤のため千葉県市川市に転居し、３年半ほどをここで過ごしています。

※日本農民美術運動：農閑期に農民が工芸品を作って売ることでものづくりの喜びを感じながら収入を得、さらには地域の産業として発展させることを目指した運動。
※児童自由画教育運動：手本の模写ではなく、児童が自分の目で見て感じたままに表現する図画教育を広める運動。

橋浦 泰雄

――『野草雑記』『野鳥雑記』挿絵

『野草雑記』『野鳥雑記』の挿絵は、プロレタリア画家であり民俗学者でもあった橋浦泰雄（1888～1979）によるものです。

橋浦は鳥取県岩美郡に生まれ、高等小学校卒業後は家業を手伝いながら読書や短歌作りや仲間との文学談義に熱中します。社会主義思想の影響を受けた橋浦は、日本プロレタリア文化運動に関わりながら作品を発表していました。

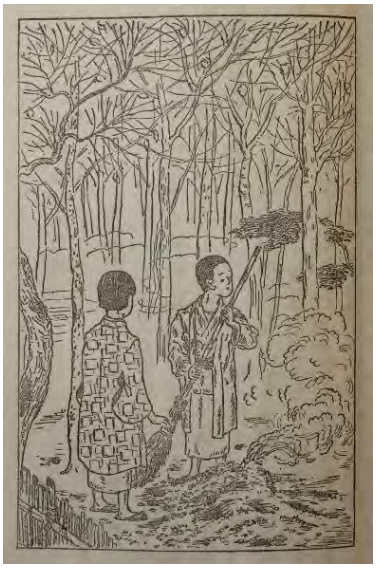
橋浦にとって初めての民俗調査は、「原始共産制」が見られる村として紹介された青森県東通村尻屋の訪問です。大正 14 年（1925）9 月 5 日、東京美術学校で講演をした柳田を訪ねたことをきっかけに、柳田の指導を受けつつ民俗調査を精力的に進めました。山村調査や海村調査にも参加し、報告書では協同労働や相互扶助に関する項目の執筆を任されています。また、自らの作品頒布会をたびたび開催するなど、画家としての活動も行っており、柳田も橋浦の展覧会発起人や頒布会賛助員に名を連ねています。

早川 孝太郎

――『歌・俳句・諺』挿絵

シリーズ日本児童文庫の第 64 巻『歌・俳句・諺』の挿絵を手がけたのは、民俗学者で画家の早川孝太郎（1889～1956）です。

愛知県南設楽郡長篠村横川（現新城市）出身の早川は、画家を志して上京し、洋画家である黒田清輝が設立した白馬会洋画研究所に入ります。そののち日本画に転じつつも絵を描き続けるなかで柳田らが創刊した雑誌『郷土研究』へ投稿、大正 4 年（1915）の 2 月号に「三州長篠より」が掲載されます。『郷土研究』休刊まで何度か投稿を続け、その後も柳田と共著で『おとら狐の話』を出版したほか、多くの民俗学者と交流しつつ民俗誌を著しました。なかでも北設楽郡に伝承される民俗芸能について記した著書『花祭』は、民俗学における早川の大きな成果として評価されています。



『歌･俳句･諺』挿絵 早川孝太郎
昭和 5 年(1930)1 月 10 日
当館蔵

画家としては、昭和 2 年（1927）から昭和 5 年（1930）まで、松岡映丘と川路柳虹を顧問に結成された新興大和絵会へ作品を出展しています。なお、『花祭』と、彼が挿絵を手がけた『歌・俳句・諺』が出版されたのは共に昭和 5 年（1930）のことでした。

折口 信夫

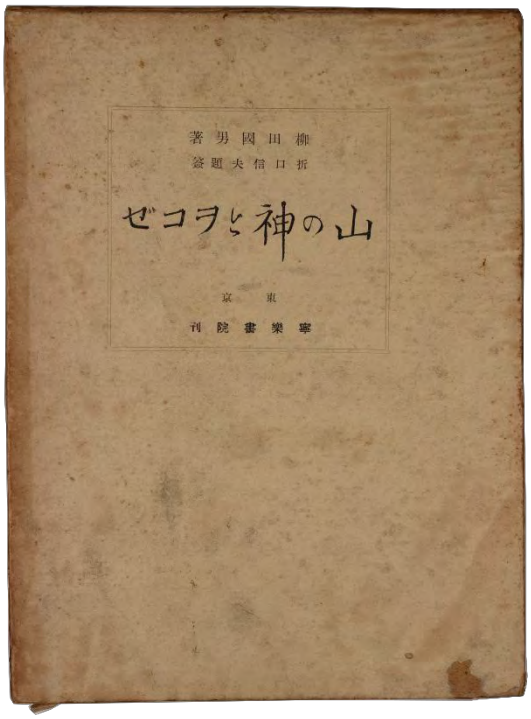
――『山の神とヲコゼ』『大白神考』題箋

『山の神とヲコゼ』と『大白神考』の題箋は、柳田國男を師と仰いだ国文学者、民俗学者の折口信夫（1887～1953）が手がけました。

明治 20 年（1887）2 月 11 日、大阪府西成郡木津村（現大阪市浪速区）に生まれた折口は、明治 43 年（1910）國學院大學を卒業後、大阪での中学校教師を経て上京し研究の道に進みました。異郷より来訪する存在を示す「まれびと」に着目して「まれびと論」を提唱し国文学や民俗学、神道学、芸能史など多岐にわたる分野で成果を残しました。

大正 4 年（1915）、雑誌『郷土研究』へ神の依り代について論じた「髯籠の話」を発表、自身でも大正 7 年（1918）に民俗学雑誌『土俗と伝説』を編集・発行しています。

また、折口は研究者としてのみならず、釈迢空という筆名で歌人や詩人としても活動しました。



『山の神とヲコゼ』
昭和 11 年(1936)8 月 1 日
当館蔵
柳田國男著作。題箋を折口信夫が手がけた。オコゼの方言や、各地で「オコゼ」と呼ばれている魚や貝、虫などがまとめられている。巻頭のオコゼの図は白井光太郎の息子が模写したものである。

折口信夫
画像所蔵・提供：國學院大學折口博士記念古代研究所

ちょっと変わった装釘の本

平野亥一コレクションに含まれる柳田國男の著書のなかには、一風変わった装釘の本があります。

たとえば『退読書歴』には山形地方のつづれ織りが使われています。これを手がけた斎藤昌三は、本書の内容を鑑み「大体の材料は国産品で、而も民俗的な製品であるべき」と考え、つづれ織りを平貼りし、背は革貼りにした装釘に仕上げました。

なお、柳田に相談すると「アレもいけない、これも困るとなっては際限がない」と考え、装釘について柳田とは打ち合わせせずに発表したと、斎藤は「『退読書歴』装釘始末記」に書いています。

さらに驚くべきは、同じく斎藤昌三の手による『共古随筆』で、これは蚕卵紙を用いた装釘です。枠と数字が刷られた紙に雌の蛾を置いて産卵させたもので、よく見ると蚕の卵がついていた跡が残っています。

斎藤昌三はほかにも古い番傘の紙、みのむしのみのや、酒をしぼった袋などを使って装釘をした人物で、柳田國男は彼の装釘を「下手もの趣味も爰まで来ては頂上だ」と評しました。

斎藤もこの言葉を借りて異質な装釘の本を指して「ゲテ本」「ゲテ装本」と呼んでいました。

『退読書歴』 表紙
昭和８年(1933)７月 20 日
当館蔵
限定1000部のうち670号

『共古随筆』 表紙
山中 笑
昭和３年(1928)４月 20 日
当館蔵
使用されている蚕卵紙は本ごとに異なる。

※斎藤昌三は「装釘」と「装幀」を使い分けていますが、ここでは『退読書歴』と『共古随筆』に言及した「『退読書歴』装釘始末記」「変った書物の話」(『斎藤昌三著作集三』)にならい「装釘」を用いました。

第６章　柳田國男と千葉

幼少期を利根川のほとりで過ごした柳田ですが、その後も千葉との関わりは続きました。兄の鼎宅の訪問や旅行でたびたび千葉を訪れたほか、農商務省の官僚時代に千葉県会議事堂で農事に関する講演「土地と産業組合」を行うなど、民俗学の研究を始めたのちも講師として何度か講演に訪れています。

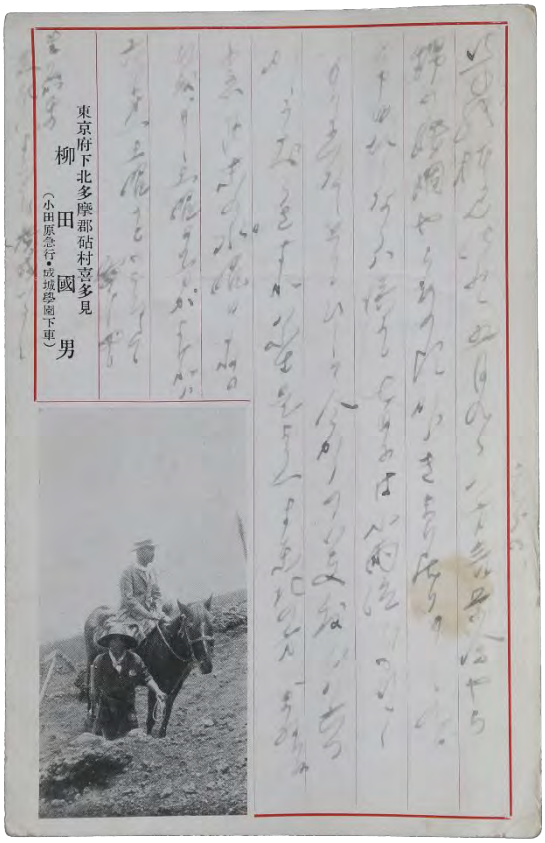
昭和 16 年（1941）５月 28 日、柳田は印旛郡国語教育研究会の例会で講演をするために遠山村（現成田市）を訪れ、遠山小学校にて「方言の調査について」という題目で講演を行いました。講演に向けて柳田とやりとりをしていたのが作家の水野葉舟です。佐々木喜善を柳田に紹介して『遠野物語』誕生のきっかけを作った葉舟は、大正 13 年（1924）に遠山村駒井野（現成田市）へ移り住み、民俗調査をしていました。

また、柳田が最後に公開講演を行ったのも千葉の地でした。昭和 35 年（1960）５月 13 日、千葉市の青雲閣で房総民俗会が主催した「柳田國男先生を囲む会」で講演し、翌日は布佐の松岡家へ兄・鼎の親族を訪ねています。

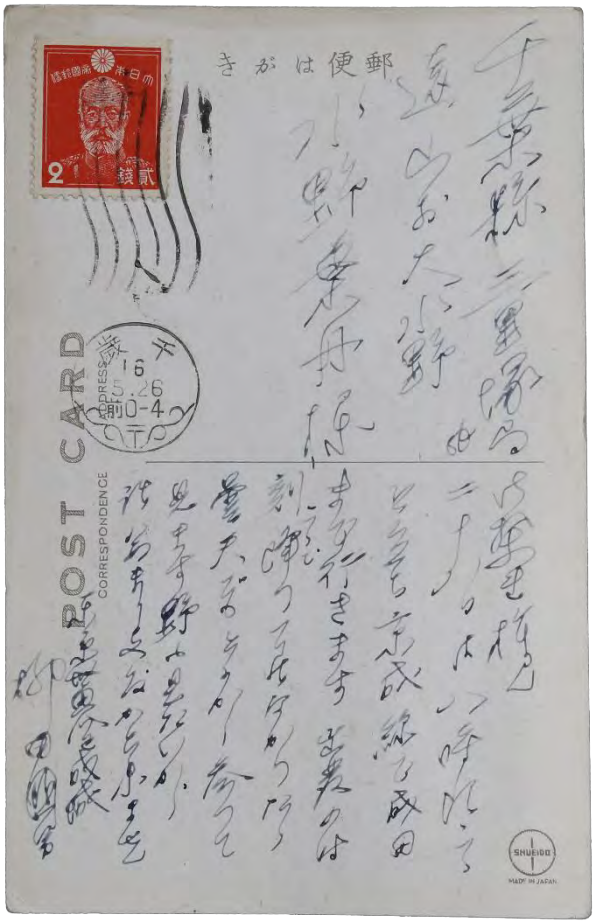
柳田國男と水野葉舟
昭和 16 年(1941)5 月 28 日
撮影：越川芳麿、個人蔵
遠山小学校での講演の際に、水野葉舟の自宅を柳田が訪れた時に撮影された。撮影者の越川芳麿は銚子出身で、昭和５年(1930)1 月「極東新聞」と題した地方新聞を創刊、言論人や歌人として活動した人物である。

柳田國男ら集合写真
昭和 16 年(1941)5 月 28 日
撮影:越川芳麿、個人蔵
遠山小学校講堂前にて撮影された写真。帽子を被った男性が柳田國男、左隣が水野葉舟、中列右端が越川芳麿。そのほかは印旛郡国語教育研究会の面々と考えられる。なおこの講堂は旧学習院初等科正堂である。

旧学習院初等科正堂
令和 7 年(2025)2 月 11 日
撮影地:千葉県立房総のむら(栄町)
明治 32 年(1899)、東京市四谷区尾張町の学習院に初等科正堂として建てられた後、昭和 11 年(1936)に千葉県印旛郡遠山村(現成田市)に下賜され、同村立尋常高等小学校(現成田市立遠山中学校)の講堂として使用された。昭和 48 年(1973)に成田市から千葉県へ寄贈、千葉県立房総のむらに移築。昭和 48 年(1973)6 月 2 日に国の重要文化財(建造物)の指定を受けた。



水野葉舟あて葉書
差出人:柳田國男、受取人:水野葉舟
昭和 16 年(1941)5 月 4 日消印
写真提供:遠野市立博物館
印旛郡国語教育研究会で講演をするにあたり、柳田が水野へ送った葉書。講演会の日程を相談している。



水野葉舟あて葉書
差出人:柳田國男、受取人:水野葉舟
昭和 16 年(1941)5 月 26 日消印
写真提供:遠野市立博物館
講演当日の28日は8時頃に発ち、京成線で成田に向かうと書かれている。

松岡兄弟と千葉

國男の父・操と母・たけの間には８人の男子が生まれましたが、３人は若くして亡くなっています。長男の鼎は医師として、三男・通泰は眼科医や歌人として、七男・静雄は海軍で大佐まで務めたほか言語学や民族学研究に励み、八男・輝夫は「映丘」の画号で日本画家として活躍しました。國男を含めた、松岡家の五人の兄弟たちは、さまざまな分野で足跡を残しています。

こうした兄弟たちとの思い出を、國男は『故郷七十年』のなかで語っています。

松岡五兄弟
大正６年(1917)８月
写真提供：福崎町立柳田國男・松岡家記念館
大正 11 年(1922)4 月 24 日、國男の二度目の渡欧に際して兄弟が集まった時の写真。左から、八男 輝夫(映丘)、七男 静雄、六男 國男、長男 鼎、三男 井上通泰。

『故郷七十年』
昭和 34 年(1959)11 月 20 日
当館蔵
昭和 33 年 1 月 9 日から同年 9 月 14 日まで神戸新聞で連載された柳田の回顧録に加筆、書籍化したもの。柳田への聞き書きがもとになっており、幼少期の出来事から学生時代、官僚や朝日新聞記者当時のことのほか、家族や友人たち、自らの研究についても記されている。

松岡 鼎

國男の兄弟の中で、千葉の地と最も縁深いのは長男の松岡鼎（1860-1934）です。

明治26年（1893）2月、布川から対岸の布佐町に移り凌雲堂医院を開業します。その後、東葛飾郡会議員に選出されたほか、東葛飾郡医師会初代医師会長、東葛飾郡私立衛生会副会長、千葉県医師会長、東葛飾郡学校衛生会長などに就任しコレラや赤痢予防などにも尽力したほか、布佐町長を1期務めました。なお、利根川でへだてられ、渡し舟で往来していた布川と布佐の間に栄橋が架けられたのは鼎が町長の時でした。

鼎はこの地で生涯を終え、現在は両親と共に布佐の勝蔵院にある墓で眠っています。

布佐文庫

明治40年（1907）6月4日、千葉県は文部省から交付された普通教育奨励費を利用して、現在の移動図書館に相当する「通俗巡回文庫」を開設しました。布佐町でも翌年4月3日、布佐尋常高等小学校の仮校舎でもあった勝蔵院に私立布佐文庫が開設されています。

松岡鼎が町民に蔵書の寄贈や委託を呼びかけて設立し、鼎をはじめ國男や通泰といった松岡兄弟のほか町の名士たちが蔵書を寄せました。鼎は、町の学務委員や布佐小学校の校医を務めるだけでなく、文化の面からも貢献していたのです。

布佐文庫は明治44年度（1909）に勝蔵院から布佐尋常高等小学校に移転して小学校附属文庫となり、名称も町立布佐文庫と改められました。さらに平成6年（1994）に、我孫子市民図書館布佐分館に移されて現在に至ります。

旧栄橋
昭和時代
写真提供：利根町立歴史民俗資料館
昭和 5 年(1930)開通。利根川を越えて千葉県と茨城県を結ぶ橋として利用された。昭和 47 年(1972)にこの橋の上流 100m のところに新栄橋が完成したことで役目を終え、取り壊された。

手賀沼の蛸釣り

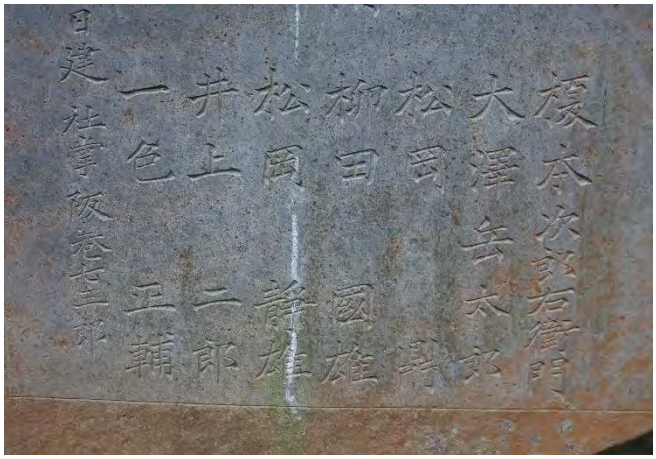
國男が布川で暮らし始めて２年後、両親と弟の静雄、輝夫も布川へ移り、一家は鼎宅で暮らしました。布川から利根川をはさんだ千葉県側にある手賀沼をめぐって、國男は弟の静雄に対してちょっとしたいたずらをしたことがありました。両親と静雄たち弟が布川に移ってきて間もない頃、國男が冗談半分に「手賀沼へ蛸を釣りに連れて行ってやる」と言ったところ静雄はすっかり信じて楽しみにしてしまい、それが嘘だとわかると大変に怒ってしまったということです。

旅順陥落記念碑

旧布佐町の竹内神社境内には、日露戦争時の旅順陥落を記念して建てられた石碑があります。

石碑には榎本次郎右衛門、大澤岳太郎、松岡鼎、柳田國雄（正しくは國男）、松岡静雄、井上二郎、一色正輔の７名の名が彫られています。

海軍士官だった静雄は、防護巡洋艦千代田の航海長として日露戦争を戦いました。仁川沖海戦、旅順口閉塞作戦、日本海海戦、樺太占領に参加しており、まさに戦地にいた静雄もこの石碑に名を連ねていたことになります。



旅順陥落記念碑（我孫子市竹内神社境内）

石碑には下記の文字のほか、松岡兄弟をはじめとした人名が刻まれている。
“IN MEMORY OF THE CONQUEST OVER THE RUSSIANS”
「櫻樹五百本寄附　明治三十八年一月一日　旅順陥落之日建　社掌　阪巻七三郎」

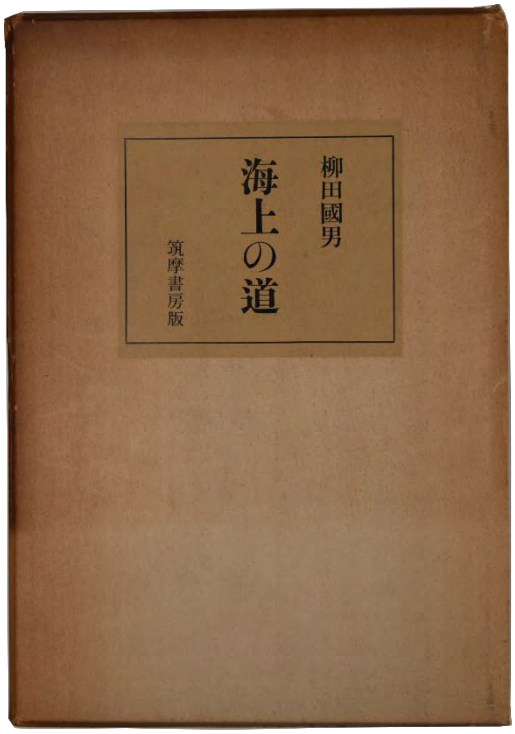
第７章　生きものへのまなざし

柳田の関心は、身近な草花や野鳥をはじめさまざまな生きものや自然にも及んでいました。たとえば、オコゼを供えて山の神を祀ることに興味を持って調べ、ついに一冊の本にまとめた『山の神とヲコゼ』、『蝸牛考』でカタツムリの呼称を集めて考察したように野草や野鳥の地方名について書いた『野草雑記』と『野鳥雑記』などがあります。

柳田は小学生のころからの鳥好きで、昭和９年（1934）の日本野鳥の会設立時には発起人となり探鳥会にも参加していました。また鳥類学者の川口孫治郎とも親交があり、自らが出版に関わる炉辺叢書シリーズから川口の著作『飛騨の鳥』（大正 10 年）、『続飛騨の鳥』（大正 15 年）を出しています。

明治 31 年（1898）愛知県伊良湖岬で椰子の実を拾ったという柳田の経験をきいた島崎藤村が詩「椰子の実」を詠んだことは知られていますが、この経験は柳田自身にも影響を与えました。最晩年の著作『海上の道』のなかで、日本人の祖先たちがこの列島に至るまでの旅を、潮の流れや風に注目して仮説を展開しています。

『後狩詞記』という山間地の猪狩報告から始まった柳田の著作は、『海上の道』で終わるのです。



『海上の道』
昭和 36 年(1961)7 月 15 日
当館蔵
日本人の祖先はなぜどのように渡って来たかという問いのもと、海流による椰子の実の漂着や日本各地での風の呼び名、タカラガイの利用と交易、沖縄の人々の信仰や他界観など、海を通じた人や物の往来に関する事例や文献が挙げられている。

オコゼいろいろ

『山の神とヲコゼ』には、山の神はオコゼを好むので供える、あるいは豊作などの望みを叶えてくれればオコゼを見せるなどと言って山の神との交渉に使われることが紹介されています。

山の神に供えられるオコゼは魚だけではなく、キセルガイの一種とみられる巻貝や、タツノオトシゴ、さなぎや毛虫、裂け目のある鹿の耳などとオコゼを呼ぶ地域もあるそうです。

遠野地方では、山中の湿地に生息する 3cm ほどの細長い貝は海の神の好物である「山オコゼ」であり、海オコゼは山の幸、山オコゼは海での豊漁の験担ぎに使われるので、山オコゼを漁師にあげると喜ばれると報告されています。

なお柳田はオコゼについて東京帝国大学農科大学教授だった白井光太郎へ問い合わせており、白井は『水族誌』や魚図を調べて息子に模写させたオコゼの図を手紙と共に送りました。白井は本展示の初版本コレクションのうち『後狩詞記』と『遠野物語』を柳田から献呈された人物です。柳田は自分では物が分らない時には白井へ問い合わせ、頼りにしていたようです。

山オコゼとキセルガイ

『山の神とヲコゼ』では、博物学者の南方熊楠が雑誌『郷土研究』4 巻 8 号で報告した「山ヲコゼ」が紹介されています。

> （大正三年）四月二十二日朝、下芳養村大字堺の漁夫一人来り、山ヲコゼてふ物を欲しいと云ふ。子細を問ふに答へけるは、山ヲコゼは北向きの山陰のシデの木などに附く長さ一寸ばかりの小介（貝）殻薄きもの也。
>
> 南方熊楠「山ヲコゼの事」『郷土研究』4 巻 8 号、郷土研究社、1916 年

その内容は、「山ヲコゼ」という北向きの山陰のシデの木などにつく長さ約 3cm の小さな貝が欲しいと和歌山県下芳養村（現在の田辺市）の漁師が訪ねて来たというものです。南方は、キセルガイの一種であろうが、どの種かはわからないと記しています。漁師によれば、この貝を持っていて大漁や博打の運に恵まれた人がいたそうです。

椰子の実

明治 31 年（1898）に愛知県の伊良湖岬を訪れた柳田は海岸に流れ着いた椰子の実とモダマを拾いました。このエピソードをもとに友人の島崎藤村が書いたのが、あの有名な詩「椰子の実」です。

「椰子の実」　作　島崎藤村

名も知らぬ遠き島より
流れ寄る椰子の実一つ

故郷の岸を離れて
汝はそも波に幾月

旧の樹は生ひや茂れる
枝はなほ影をやなせる

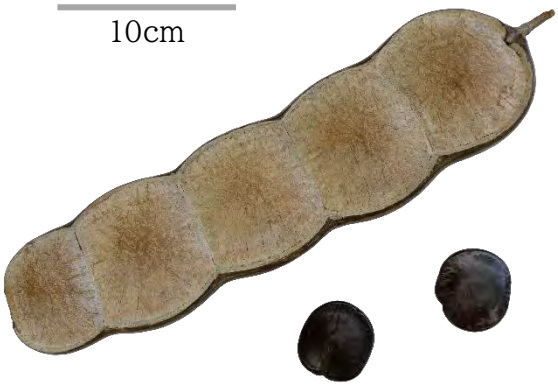
われもまた渚を枕
孤身の浮寝の旅ぞ

実をとりて胸にあつれば
新なり流離の憂

海の日の沈むを見れば
激り落つ異郷の涙

思ひやる八重の汐々
いづれの日にか国に帰らん

ヤシの実　10cm



ヒメモダマのさやと種子　10cm

モダマの種子　10cm
採集地：鴨川市東条海岸

※旧字体は新字に直しています。
詩の出典：島崎藤村『藤村詩集』春陽堂、1904 年
国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/876416
（参照 2025-02-06）

※日本の海岸に漂着した記録のあるモダマのなかまは、モダマ、ヒメモダマなど 4 種ありますが、柳田が拾ったものがどの種であるかは不明です。

自宅の前で
昭和 10 年(1935)頃
撮影地:東京府北多摩郡砧村(現在の東京都世田谷区成城)
写真提供:成城大学民俗学研究所
左に建つ洋館は柳田の書斎兼住居で、柳田によって「喜談書屋」と名付けられた。柳田はここで研究会を開催したり、昭和 22 年(1947)以降は民俗学研究所として開放したりと民俗学研究の拠点とした。現在は飯田市美術博物館敷地内に移築され、国の登録有形文化財(建造物)となっている。『野草雑記』にはたびたびこの自宅の庭が登場する。

『野草雑記・野鳥雑記』
昭和 15 年(1940)11 月 30 日
当館蔵
野草や野鳥の地方名を挙げ、その由来についての考察が記されている。これまでの調査先で柳田が目にした野草や鳥、あるいは幼少期や執筆当時暮らしていた砧(現在の東京都世田谷区成城)の風景も紹介されている。

『野草雑記・野鳥雑記』に登場する生きもの

●スギナ・つくし●

　スギナはシダ植物の一種で、地下茎でひろがります。春先にこの地下茎から伸び、胞子を作ることに特化した茎のことを土筆（つくし）と呼びます。

📖『野草雑記』「虎杖及び土筆」「草の名と子供　馬の砂糖」より

☆スギナの方言☆

マツナ、マツブキ、シギナ、スイナ、スギグサ、ツギグサ、ツギナ

☆つくしの方言☆

ツクシンボ、ツクツクボウズ、ヅクヅクシ、ヅクヅク、ツギグサ、ツギツギ、ドコドコグサ、ツギマツ、ホウシ、ホウシコ、ホウシャ、ゴボウ、ホトケンボウ、ヒガンボウズ、キタカタゴンス、ホウセンツクツク、ヅクベ、フデハナ、キツネノロウソク、イノノチンボ

（左）スギナ（栄養茎）
（右）つくし（胞子茎）
撮影地：中央博物館生態園

●シジュウカラ（四十雀）●

　春から夏にかけて「ツツピー　ツツピー」とよく通る声で囀ります。木の幹に空いた穴に巣を作りますが、ポストや植木鉢などの人工物を使ったり、人のかけた巣箱を使うこともあります。

📖『野鳥雑記』より

「四十雀が家を捜しまわって、巣箱の近くへ来てもまだ考えている。それを里雀が見かけると急いで先へ入り、またはまだ相手もきまらぬのに邪魔をしようとする。だから巣箱の穴を出来るだけ小さくして、始めから雀が断念するように、四十雀だけにしか入れぬようにしなければならぬのである」

（「談雀　雀の国語」より）

「四十雀は幾分か啼声に変化が多く、山に入ってあれも四十雀かと、不思議に思うことがある位であり、コガワラヒワなども聴いていると囀に二色三色、地鳴きも場合によって全く別なものを使うが、頬白にいたっては雄は半日でも同じ調子の高音をくり返し、雌はごく無口でただ時々地鳴きをする」

（「談雀　雀の引越し」より）

シジュウカラ
撮影地：中央博物館生態園

新収蔵資料　柳田國男直筆原稿・メモ

千葉県立中央博物館令和７年度トピックス展「民俗学の父・柳田國男―本から読み解く暮らしへのまなざし―」に向けて行った調査の中で、柳田國男直筆の原稿や執筆時のメモなどが新たに発見されました。昭和 12 年（1937）刊行の『婚姻習俗語彙』執筆にあたって書かれたと思われるメモ、昭和 26 年（1951）刊行『大白神考』の原稿、佐々木喜善から柳田宛ての書簡、そしてロシア出身の言語学者・民俗学者であるニコライ・アレクサンドロヴィッチ・ネフスキーが柳田に宛てた書簡の封筒など計 37 点で、千葉県立中央図書館にて保管されていたものです。

これら 37 点の資料は、令和７年（2025）３月に県立中央博物館へ移され、同館収蔵資料となりました。

柳田の渡欧壮行会にて
大正 10 年(1921)3 月 31 日
画像所蔵・提供：國學院大學折口博士記念古代研究所
折口信夫宅にて。前列右より柳田國男、ニコライ・ネフスキー、金田一京助。
後列左端が折口である。国際連盟委任統治委員に就任した柳田は、この後
5月に渡欧した。

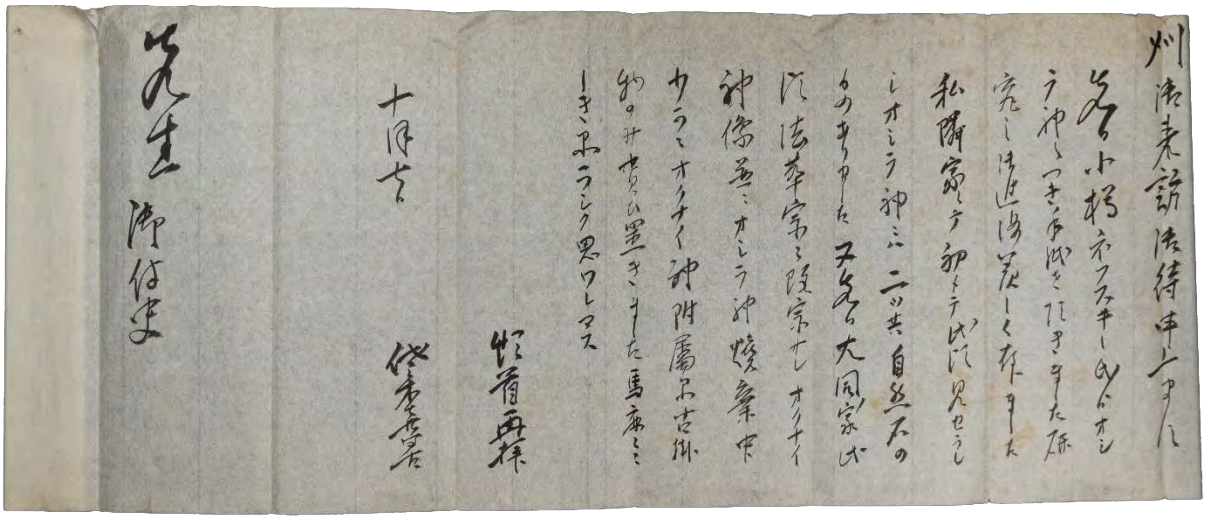
柳田國男と佐々木喜善、ニコライ・ネフスキー

かねてよりオシラサマに関心を寄せて調査を行っていたニコライ・ネフスキーは、大正９年（1920）３月23日、柳田の勧めによって、佐々木喜善へオシラサマの共同研究をもちかける手紙を送りました。その後、二人は調査報告カードを送りあって研究を進めるとともに、それぞれの研究成果を柳田に報告する手紙も送っていました。今回発見された便箋と封筒も、その一つであると考えられます。

ニコライ・アレクサンドロヴィッチ・ネフスキーは、ロシア（ソ連）出身で日本の民俗研究をはじめアイヌ語、宮古島の方言、西夏語研究など言語学でも大きな業績を挙げました。

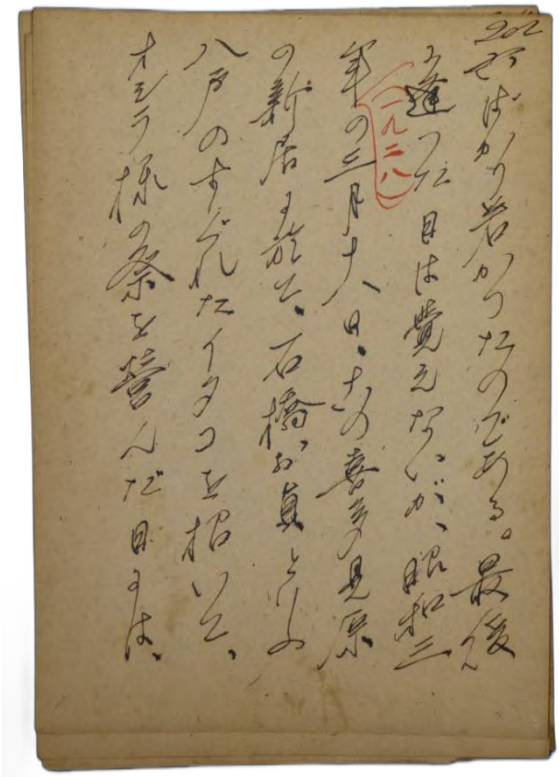
しかしソ連帰国後スパイ容疑をかけられて日本人の妻・イソ（磯子）と共に拘束され、粛清として二人とも銃殺刑となりました。

この事実が明らかになったのは1990年代のことであり、昭和31年（1956）スターリン批判後のソ連による情報公開では病死とされていました。『大白神考』執筆当時の柳田はまだその死を知らず、その身を案じ続けていました。その後、柳田も彼の死を知ることとなりますが、死亡時期については情報が錯綜していたようで、昭和34年（1959）刊行の『故郷七十年』では牢死したと記されています。『大白神考』序文の差し替えや題の変更によってネフスキーについての記述がさらに加えられており、ネフスキーのオシラ神研究の成果を少しでも書き残し伝えようという柳田の意思がうかがえます。

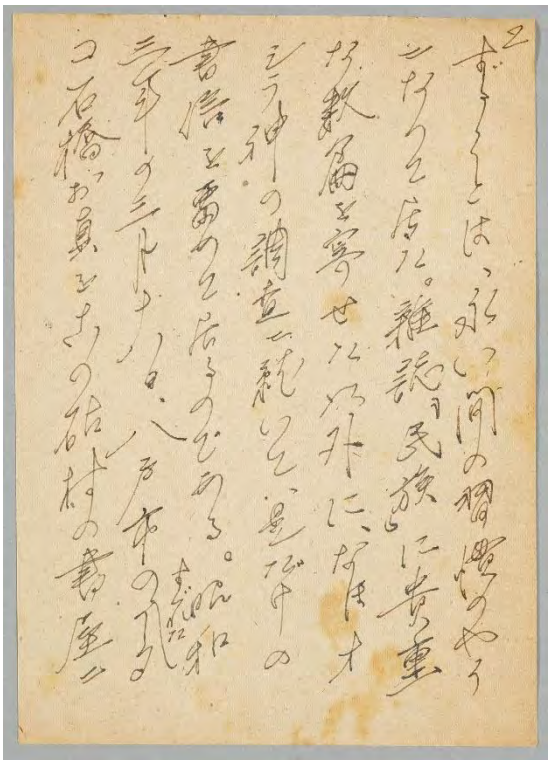


便箋
差出人：佐々木喜善、受取人：柳田國男
年代不明（大正時代か）
当館蔵
佐々木喜善が柳田國男に宛てて書いたもので、ニコライ・ネフスキーからオシラサマ研究について手紙を受け取ったこと、隣家のオシラサマを見たこと、大同家のオクナイサマとオシラサマの像が改宗に伴い焼かれてしまったことなどが記されている。ネフスキーが柳田に宛てて出した封筒に入れられていた。

「おしら初稿了」
（『大白神考』序文原稿「オシラ様とニコライ・ネフスキー」）
柳田國男
昭和 26 年(1951)5月
当館蔵
封筒には「おしら初稿了」のラベルが貼られており、『大白神考』序文の初校とみられる。昭和 26 年(1951)5 月に書き上げられた原稿に赤字で校正が行われており、これらは刊行された実業之日本社版『大白神考』に反映されている。
当初の章題は「我々のオシラ仲間」であったことが分かる。

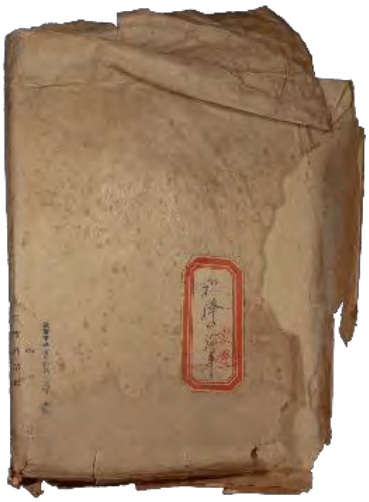


「おしら初稿了」
（『大白神考』序文原稿「オシラ様とニコライ・ネフスキー」）
柳田國男
昭和 26 年(1951)5月
当館蔵

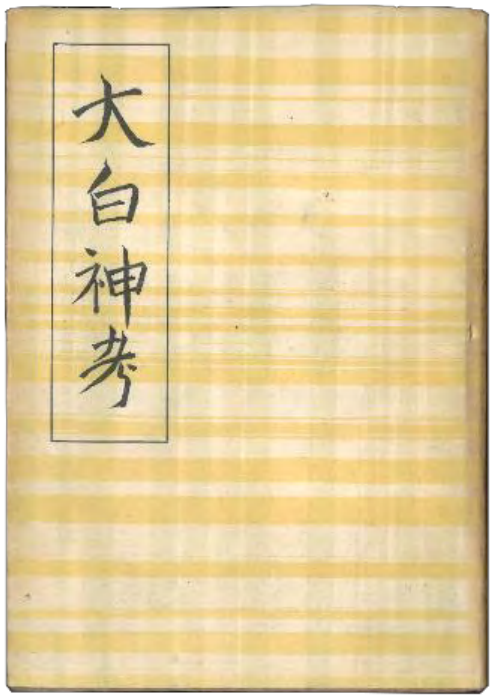


「『大白神考』序文の差し替え文」
柳田國男
昭和 26 年(1951)7 月
原資料所蔵：成城大学民俗学研究所

序文の一部が差し替えられており、「おしら初稿了」用紙四枚分だった箇所が、十枚にわたる文章に修正されている。ネフスキーとの思い出や、ソビエトに帰国したネフスキーの研究成果がどのように残されているか心配する文章が加筆されている。

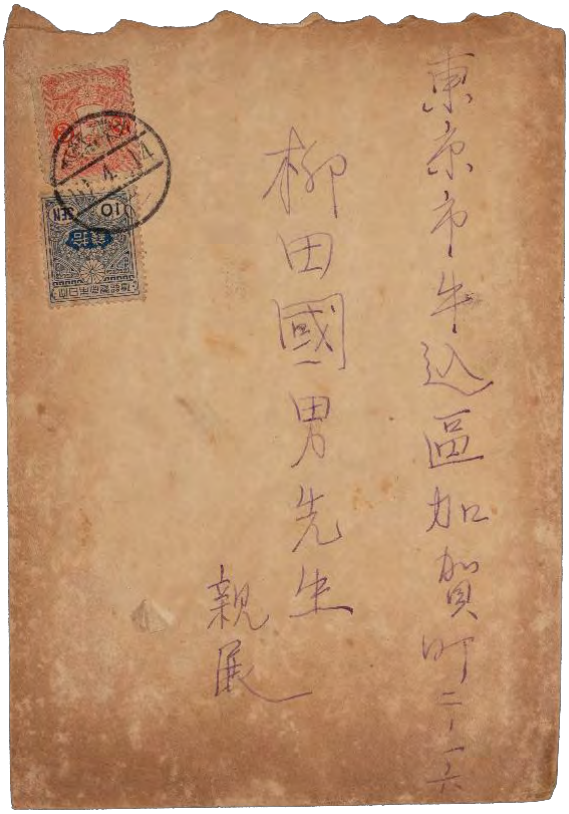


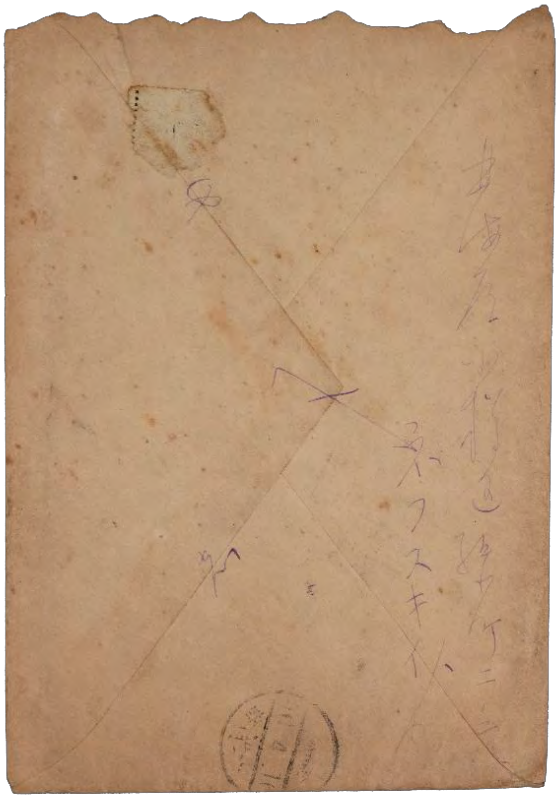
「祝棒の変遷」(『大白神考』原稿)
柳田國男
昭和 26 年(1951)か
当館蔵
昭和26年(1951)刊行時の章題は「おしら神と執り物」であり、執筆や校正の段階で章題が何度か変更されていることがわかる。
なお本稿の初出は、昭和 22 年(1947)発行の『新國學談　第二冊』(小山書店)に掲載された「おしら神と執り物」である。

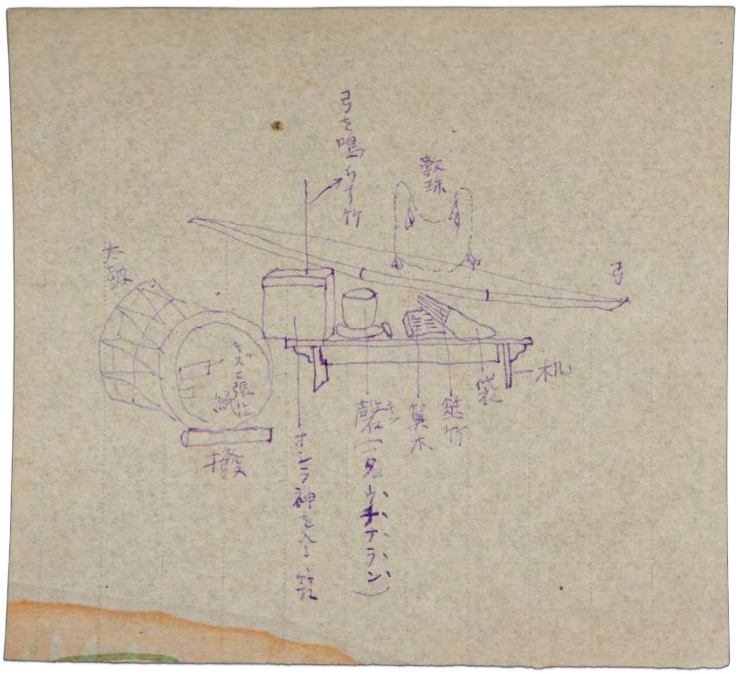


『柳田國男先生著作集　第十一冊
大白神考』
昭和 26 年(1951)9 月 1 日
個人蔵
東北地方でさかんに行われるオシラ神信仰について、オシラ神の由来や異名、祀り方などを、各地の事例をもとに論じた。ネフスキーや佐々木喜善をはじめ、ほかの民俗学者たちの調査成果なども活用されている。
題箋は折口信夫による。

佐々木家のオシラ神
撮影：ニコライ・ネフスキー
大正 6 年(1917)8 月
写真提供：遠野市立博物館
大正 6 年(1917)に岩手県の土淵村へ佐々木喜善を訪ねたネフスキーは、上の写真に写るオシラ神一組をもらい受けた。







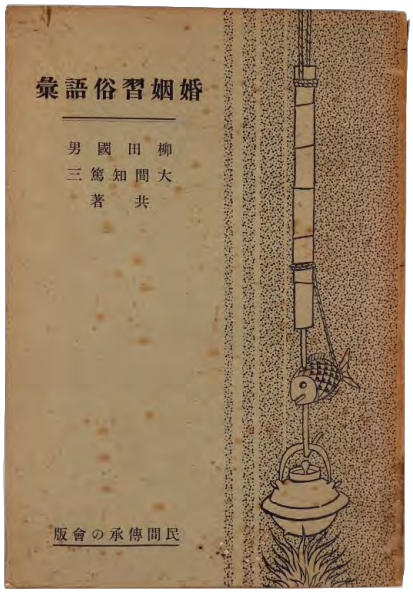
封筒（表・裏）と同封のオシラ神祭祀メモ
差出人：ニコライ・ネフスキー、受取人：柳田國男
大正 10 年（1921）4 月 14 日消印
当館蔵
封筒裏面に「ネフスキイ ケ」と書かれている。この封筒に佐々木喜善が柳田に宛てた便箋とイラストの描かれたメモが入った状態で千葉県立中央図書館にて保管されていた。メモにはオシラ神の祭祀に使われる道具が描かれており、この作成者はニコライ・ネフスキーとみられる。

『婚姻習俗語彙』執筆用メモ

昭和12年（1947）刊行の『婚姻習俗語彙』（柳田國男、大間知篤三共著、民間伝承の会）執筆にあたり作成されたとみられるメモも発見されています。

「婚（番号・タイトル）」のラベルが貼られた封筒には、各地の事例が記された柳田直筆のメモが入っており、番号とタイトルは『婚姻習俗語彙』の章立てと対応しています。『婚姻習俗語彙』にある序文、引用書名略字表、索引のほか、「二五　嫁の産屋」、「二六　杓子渡し」、「二九　宿の生活」、「三一　私生兒」のメモと封筒は今回見つかった資料群にはありませんでした。

メモには婚姻に関する語彙とその意味、使用地域や文献の内容などが書かれており、裏面には「婚（番号）」などとメモの通し番号とみられる番号がスタンプされています。



『婚姻習俗語彙』
柳田國男、大間知篤三
昭和12年(1937)3月10日
当館蔵
婚姻に関することばが収録されている。章ごとに、簡単な解説に続いて、ことばとその意味、使い方が列挙されている。

『婚姻習俗語彙』執筆メモ
柳田國男
年代不明
当館蔵
『婚姻習俗語彙』35章のうち31章ぶんのメモで、章立てごとに封筒へ入れられている。メモは「財団法人民俗學研究所」と印字された封筒に入れられていた。なお民俗学研究所が財団法人の認可を受けたのは昭和22年(1947)である。

柳田國男のことば

柳田の著作につづられたことばから、
その研究の歩みをたどります。

「何故に農民は貧なりや」

———柳田國男『郷土生活の研究法』（昭和10年）より

「子供の言葉が交つていなかつたら國語はもう少し几帳面な、愛嬌の乏しいものになつて居たかも知れません」

———柳田國男『小さき者の聲』（昭和8年）より

「我々の共通の課題は、村が一個の有機體として、命長く活きて来た生理を明かにしようといふに在つた」
「文字計數の資料が得られぬとすれば、出来るだけ多くの互に隔絶した土地に於て、同時同様式の観測を試み、其間に共通した若干の事實から、前代生活の痕跡を探り出すのほかは無いと考へて、先づ最初に幾つかの特に顕著な事項を拾ひ上げて見た」

———柳田國男『採集事業の一劃期』（昭和10年）より

「曲亭馬琴の『烹雑記』といふ随筆に、佐渡ヶ島の記事がやや詳しく載せられ、濱に流れ寄るくさぐさの異郷の産物の中に、椰子藻珠などが有ることを誌して居る。其モダマといふのは正しい名かどうか知らぬが、伊良湖で椰子と共に私が拾った中にも、藤の實の形をして莢が二尺もあり、堅く扁たい濃茶色の豆をもつたものを、土地でもモダマと呼んで居たから同じもので、産地季節が同じかつた為に、偶然に長い海上の旅を共にすることがあつたのであらう」

※二尺は約60cm

———柳田國男『海上の道』（昭和36年）より

「イナサという言葉をきくと、いつも布川のころの少年の日を思い出す」
「子供の私が大利根の白帆に驚き、イナサの名に強く心をひかれてから、その後少しでもこれに似よった言葉があると、すぐ結びつけて考えるのが常となった」

———柳田國男『故郷七十年』（昭和34年）より

「言葉によって比較するためには、言葉を正確にし而かも共通なものとすること、即ちその言葉の意味をはつきりさせなくてはならない。そこで言葉の地方毎の異同を明らかにしなければならぬ。即ち何といふ言葉を何といふところでは何といふか、といふことを調べなければならない」

———柳田國男『郷土生活の研究法』（昭和10年）より

「郷土を研究しようとしたので無く、郷土で或ものを研究しようとして居たのであつた。その『或もの』が何であるかと言へば、日本人の生活、殊にこの民族の一團としての過去の経歴であつた。それを各自の郷土に於いて、もしくは郷土人の意識感覚を透して、新たに學び識らうとするのが我々どもの計畫であつた」

———柳田國男『國史と民俗學』（昭和19年）より

「今でも明らかに記憶するのは、この小山の裾を東へまはって、東おもての小松原の外に、舟の出入りにはあまり使はれない四五町ほどの砂濱が、東やや南に面して開けて居たが、そこには風のやや強かつた次の朝などに、椰子の實の流れ寄つて居たのを、三度まで見たことがある。一度は割れて眞白な果実の露はれ居るもの、他の二つは皮に包まれたもので、どの邊の沖の小島から海に泛んだものかは今でも判らぬがともかくも遥かな波路を越えて、まだ新らしい姿でこんな浜辺まで、渡ってきていることが私には大きな驚きであった」

※一町は100m四方で1ヘクタールに同じ

———柳田國男『海上の道』（昭和36年）より

参考文献

我孫子市史編集委員会近現代部会編『我孫子市史近現代編』我孫子市教育委員会、2004 年
恩地邦郎編『恩地孝四郎　装本の業』三省堂、1982 年
恩地孝四郎『本の美術』出版ニュース社、1973 年
石井了介『石井了介画集』熊本日日新聞情報文化センター、1983 年
石田英一郎『桃太郎の母 比較民族学的論集』法政大学出版局、1956 年
岡田照子監修、刀根卓代解説「瀬川清子『採集手帖（沿海地方用）』『郷土生活研究採集手帖』」瀬川清子研究会、2014 年
小田富英「野に生きる・水野葉舟論序説―『遠野物語』以後の国男と葉舟―」『伊那民俗研究』第４号、柳田國男記念伊那民俗学研究所、1994 年
加藤九祚『完本　天の蛇　ニコライ・ネフスキーの生涯』河出書房新社、2011 年
上 笙一郎『聞き書　日本児童出版美術史』太平出版社、1974 年
後藤憲二編『斎藤昌三著作集』第３巻、八潮書店、1981 年
坂田 燦「石井了介の画業」『研究紀要　第３号』熊本県立美術館、1989 年
杉本仁『柳田國男と学校教育―教科書をめぐる諸問題―』梟社、2011 年
須藤功『早川孝太郎―民間に存在するすべての精神的所産―』ミネルヴァ書房、2016 年
高橋在久「柳田國男先生の書簡」『セルボーン』日本水土文化研究所、1984 年
多田傳三「山の神とオコゼ」『民間伝承』第 15 巻第５号、日本民俗学会、1951 年
田中重弥『日本の童画２　武井武雄・初山滋・岡本帰一』第一法規出版、1981 年
田中正明「柳田國男の著作・著作収録書　書誌」『国立歴史民俗博物館研究報告』165、国立歴史民俗博物館、2011 年
玉井里奈
「資料収集・調査・展示―日本民俗学の父・柳田國男にかかわる資料をめぐって―」「中央博物館だより 75 号」千葉県立中央博物館、2025 年
「千葉県立中央博物館新収蔵資料『柳田國男直筆原稿・メモ及び柳田宛書簡』について」成城大学常民文化研究会編『常民文化』第 49 号、成城大学常民文化研究会、2026 年
千葉徳爾「柳田國男の最終公開講演『日本民俗学の退廃を悲しむ』について」『日本民俗学』第 194 号、日本民俗学会、1993 年
鶴見太郎『橋浦泰雄伝―柳田学の大いなる伴走者』晶文社、2000 年
定本柳田國男集編纂委員会編『定本柳田國男集　別巻第五』筑摩書房、1971 年
寺石正路『南国遺事』武内書店、1916 年
天理図書館編『ビブリア』147 号、天理大学出版部、2017 年
遠野市立博物館編『柳田國男と「遠野物語」』遠野市立博物館、2000 年（初版 1992 年）
遠野市立博物館編『佐々木喜善全集（Ⅳ）』遠野市立博物館、2003 年
ニコライ・ネフスキー著、岡正雄編『月と不死』平凡社、1971 年
福崎町立柳田國男・松岡家記念館編『松岡鼎展～柳田國男を導いた兄～』2015 年
文京区立森鷗外記念館編『本を捧ぐ―鷗外と献呈本』文京区立森鷗外記念館、2025 年
水谷悟「『極東新聞』と越川芳麿――地方新聞から見る昭和期の銚子―」『歴史地理学調査報告』第 10 号、筑波大学歴史・人類学系歴史地理学研究室、2002 年
南方熊楠「山ヲコゼの事」『郷土研究』第４巻第８号、郷土研究社、1916 年
茂木明子『柳田國男のペン―書入れにみる後代へのメッセージ』慶友社、2022 年
柳田國男「土佐高知より」『郷土研究』第４巻第７号、郷土研究社、1916 年
柳田國男『山の神とヲコゼ』寧楽書院、1936 年
『伊那民俗研究』第３号、柳田國男記念伊那民俗学研究所、1992 年
成城大学民俗研究所デジタルアーカイブ「『大白神考』序文の差し替え文」
https://adeac.jp/seijo-univ-inst-folklore/catalog/mp000280-200010

展示資料一覧　令和7年度トピックス展「民俗学の父・柳田國男－本から読み解く 暮らしへのまなざし－」（会期：令和7年4月15日～6月15日）

★は柳田國男著書および関係書籍（平野亥一コレクション）

No.	資料名	所蔵	著者・作者等	発行年・年代	出版社・発行所	価格	寸法
	ごあいさつ						
	謝辞・協力者						
	柳田國男とは						
	平野亥一コレクション						
1	「傀儡子の故郷」『演劇史研究第二輯』所収	個人	平野亥一	昭和7年（1932）	第一書房	2円50銭	22.5×17.0
	第１章　幼少期の好奇心						
2	写真　松岡兄弟（布川の徳満寺境内にて）	写真提供：利根町立歴史民俗資料館		明治22年（1889）11月29日			
3	写真　13歳の松岡國男	写真提供：利根町立歴史民俗資料館		明治21年（1888）5月			
4	写真　86歳の柳田國男	写真提供：利根町立歴史民俗資料館		昭和36年（1961）12月			
	柳田國男関連地図						
5	『故郷七十年』	当館	柳田國男	昭和34年（1959）11月20日	のじぎく文庫	550円	18.5×14.0
6	『利根川図志』	当館	赤松宗旦	江戸時代（安政年間）			
7	『利根川図志』	当館★	校訂：柳田國男	昭和15年（1940）12月20日二刷発行 昭和13年（1938）11月15日発行	岩波書店	60銭	15.7×10.5
8	写真　間引き絵馬	原資料所蔵：徳満寺、写真提供：利根町立歴史民俗資料館		不明			
9	写真　「三倉沿革」ノート	原資料所蔵：成城大学民俗学研究所	柳田國男	明治36年（1903）			
10	写真　布川の風景	写真提供：利根町立歴史民俗資料館		昭和時代中期			
11	写真　利根川をいく高瀬船	所蔵：齋藤家、写真提供：我孫子市教育委員会		明治時代			
12	写真　布佐町並み			大正元年（1912）			
	第２章　「民の暮らし」へのまなざし						
13	写真　官僚時代の柳田國男	写真提供：利根町立歴史民俗資料館		明治44年（1911）頃			
14	『時代ト農政』	当館★	柳田國男	明治43年（1910）12月8日	聚精堂	正価金1円10銭	22.5×16.0
15	『後狩詞記』	当館★	柳田國男	明治42年（1909）3月15日	自家出版（杏林舎）	不明	21.5×14.0
16	『後狩詞記』標題紙　柳田國男サイン	原資料所蔵：当館★		明治時代			
17	写真　『後狩詞記』葉書	原資料所蔵：成城大学民俗学研究所		不明			
18	『石神問答』	当館★	柳田國男	明治43年（1910）5月20日	聚精堂	正価85銭、定価1円10銭	20.5×13.0
19	『遠野物語』	当館★		明治43年（1910）6月14日	聚精堂	50銭	23.5×16.0
20	『遠野物語』標題紙　柳田國男サイン	原資料所蔵：当館★		明治時代			
21	『遠野物語』（増補版）	当館★	柳田國男	昭和10年（1935）7月31日	郷土研究社	3円	23.4×15.5
	パネル　『遠野物語』初版と増補版の違い						
22	絵はがき　遠野町全景	写真提供：遠野市立博物館		明治44年（1911）			
23	佐々木喜善、水野葉舟ほか集合写真	写真提供：遠野市立博物館		不明			
	第３章　あつめて　　くらべる						
24	『民間伝承論』	当館★	柳田國男	昭和9年（1934）8月25日	共立社	2円20銭	23.5×17.0
25	『郷土生活の研究法』	当館★	柳田國男	昭和10年（1935）8月18日	刀江書院	1円50銭	20.1×14.0
26	『世相扁　明治大正史４』	当館★	柳田國男	昭和6年（1931）1月20日	朝日新聞社	不明	22.4×10.3
27	『蝸牛考』	当館★	柳田國男	昭和5年（1930）7月10日	刀江書院	1円80銭	19.1×13.2
28	『蝸牛考』	当館★	柳田國男	昭和18年（1943）2月25日	創元社	1円60銭	18.5×13.0
	パネル　『蝸牛考』初版と増補版の違い						
29	写真　初期木曜会のメンバーたち	写真提供：成城大学民俗学研究所		昭和9年（1934）頃			

No.	資料名	所蔵	著者・作者等	発行年・年代	出版社・発行所	価格	寸法
30	『郷土生活採集手帖』 千葉縣君津郡亀山村	原資料所蔵：成城大学民俗学研究所	瀬川清子	昭和9年（1934）～昭和10年（1935）			
31	『郷土生活採集手帖』 千葉縣君津郡亀山村	原資料所蔵：鹿角市教育委員会	瀬川清子	昭和9年（1934）～昭和10年（1935）			
32	『山村生活の研究』	当館★	柳田國男	昭和12年（1937）6月10日	民間伝承の会（岩波書店）	1円90銭	22.5×15.3
33	『採集手帖（沿海地方用）』千葉縣安房郡富崎村	原資料所蔵：成城大学民俗学研究所	瀬川清子	昭和12年（1937）			
34	『採集手帖（沿海地方用）』千葉縣安房郡千倉町	原資料所蔵：鹿角市教育委員会	瀬川清子	昭和12年（1937）～昭和13年（1938）			
35	『採集手帖（沿海地方用）』愛知縣北設楽郡振草村／千葉縣安房郡長尾村	原資料所蔵：鹿角市教育委員会	瀬川清子	昭和12年（1937）～昭和13年（1938）			
36	『採集手帖（沿海地方用）』	当館★	柳田國男	昭和12年（1937）11月25日	民間傳承の會	なし	15.5×11.5
37	『海村調査報告（第一回）』	当館★	柳田國男	昭和14年（1939）8月15日	民間傳承の會	50銭	22.2×15.0
38	『海村生活の研究』	千葉県立中央図書館	柳田國男	昭和24年（1949）4月20日	日本民俗学会	450円	21.0×15.0
39	『分類漁村語彙』	当館★	柳田國男	昭和13年（1938）12月1日	民間傳承の會	1円30銭	18.9×12.9
40	写真　民俗学研究所の理事らと	写真提供：成城大学民俗学研究所		昭和30年（1955）12月4日			
第４章　こどもたちのことば							
41	『小さき者の聲』	当館★		昭和8年（1933）4月5日	玉川學園出版部	20銭	15.5×11.0
42	『こども風土記』	当館★		昭和17年（1942）2月27日	朝日新聞社	1円60銭	26.0×18.8
43	『改訂　あたらしいこくご』 （小学校1～3学年向け国語教科書）	御宿町 「五倫文庫」	監修：柳田國男	昭和26年（1951）6月、 昭和28年（1953）5月	東京書籍	なし	21.0×15.0
第５章　書籍を彩った人々―装幀・挿画・題字―							
44	写真　松岡静雄と松岡映丘	写真提供：福崎町立柳田國男・松岡家記念館					
45	『退読書歴』	当館★	柳田國男	昭和8年（1933）7月20日	書物展望社	3円	19.0×13.5
46	松岡映丘「生家」	写真提供：福崎町立柳田國男・松岡家記念館	松岡映丘	昭和8年（1933）頃			
47	『野草雑記・野鳥雑記』（岩波文庫）	個人	柳田國男	平成23年（2011）1月14日	岩波書店	840円（本体）	14.8×10.5
48	『日本昔話集（上）』（日本児童文庫11）	当館★	著：柳田國男 挿画：橋浦泰雄	昭和5年（1930）3月20日	アルス社	非売品	23.6×16.5
49	『日本神話傳説集』（日本児童文庫８）	当館★	著：柳田國男 装幀：恩地孝四郎 挿画：石井了介	昭和4年（1929）5月3日	アルス社	非売品	19.0×13.2
50	『歌・俳句・諺（日本児童文庫61）』	当館★	著：折口信夫、高浜虚子、柳田國男 装幀・口絵：恩地孝四郎 挿絵：早川孝太郎	昭和5年（1930）1月10日	アルス社	非売品	19.0×13.0
51	『山の神とヲコゼ』函	当館★		昭和11年（1936）8月1日	寧樂書院	1円20銭	20.9×15.6
52	『柳田國男先生著作集　第十一冊　大白神考』	個人	柳田國男	昭和26年（1951）9月1日	実業之日本社	350円	17.5×12.5
53	写真　折口信夫	写真提供：國學院大學博物館					
第６章　柳田國男と千葉							
54	写真　松岡五兄弟	写真提供：福崎町立柳田國男・松岡家記念館		大正6年（1917）8月			
55	千葉徳爾「柳田国男の最終公開講演『「日本民俗学の退廃を悲しむ』について」『日本民俗学　194号』	個人		平成5年（1993）5月	日本民俗学会		
56	「セルボーン　1984年夏季　創刊号」	千葉県立中央図書館		昭和59（1984）年7月	日本水土文化研究所		
57	写真　柳田國男と水野葉舟	原資料所蔵：個人	撮影：越川芳麿	昭和16（1941）年5月28日			
58	写真　柳田國男ら集合写真	原資料所蔵：個人	撮影：越川芳麿	昭和16年（1941）5月28日			
59	水野葉舟あて葉書	写真提供：遠野市立博物館	差出人：柳田國男 受取人：水野葉舟	①昭和16年（1941）5月4日消印　②昭和16年（1941）5月26日消印			

No.	資料名	所蔵	著者・作者等	発行年・年代	出版社・発行所	価格	寸法
60	写真　旧学習院初等科正堂		撮影地：千葉県立房総のむら（栄町） 国指定重要文化財（建造物）	令和7年（2025）			
61	写真　旧栄橋	写真提供：利根町立歴史民俗資料館		昭和時代			
第７章　生きものへのまなざし							
	詩　椰子の實						
61	『山の神とヲコゼ』	当館★		昭和11年（1936）8月1日	寧樂書院	1円20銭	20.9×15.6
62	『奇談雑史／奇談雑誌次編』	当館	著：宮負定雄、参澤明、校訂・注・解説：武田由紀子	平成25年（2013）11月30日	真文館		21.0×15.0
	パネル　生態園で見られる『野草雑記』『野鳥雑記』の生きものたち						
63	オニオコゼ標本	当館					
64	写真　自宅の前で	写真提供：成城大学民俗学研究所	撮影地：東京府北多摩郡砧村（現在の東京都世田谷区成城） 国登録有形文化財（建造物）	昭和10年（1935）頃			
65	『野草雑記』『野鳥雑記』	当館★	柳田國男	昭和15年（1940）11月30日	甲鳥書林	1円80銭	函：14.8×11.0
66	キセルガイ標本	当館					
67	『海上の道』	当館★		昭和36年（1961）7月15日	筑摩書房	650円	22.5×16.0
68	タカラガイ標本	当館					
新収蔵資料　柳田國男直筆原稿・メモ							
69	『大白神考』柳田直筆序文原稿「おしら初稿了序文」	当館	柳田國男	昭和26年（1951）			
70	『大白神考』初稿　柳田直筆原稿「祝棒の変遷」	当館	柳田國男	昭和26年（1951）か			
71	『柳田國男先生著作集　第11冊　大白神考』	千葉県立中央図書館	柳田國男	昭和26年（1951）9月1日	実業之日本社	350円	17.5×12.5
72	佐々木喜善から柳田宛の書簡	当館		不明（大正時代か）			
73	ネフスキーから柳田宛の封筒	当館		大正10年（1921）4月14日消印			
74	写真　佐々木家のオシラ神	写真提供：遠野市立博物館	撮影：ニコライ・ネフスキー	大正6年（1917）8月			
75	写真　柳田の渡欧壮行会にて	写真提供：國學院大學博物館		大正10年（1921）3月31日			
76	『月と不死』（東洋文庫185）	個人	著：ニコライ・ネフスキー 編：岡正雄	昭和46年（1971）4月10日	平凡社	600円	17.5×11.5
77	柳田直筆『婚姻習俗語彙』執筆メモ	当館	柳田國男	不明			
78	『婚姻習俗語彙』	当館★	柳田國男、大間知篤三	昭和12年（1937）3月10日	民間傳承の會	1円50銭	18.9×13.0

展示協力者

展示の開催ならびに資料調査にあたり、次の個人・機関の皆様にご協力を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

（敬称略・順不同）

平野 綏、平野紀子、松岡 弘、越川行雄、齋藤家、岡田照子、刀根卓代、岩田 博
米谷 博、榎美香、石井友菜
我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課歴史文化財係
御宿町公民館
鹿角市教育委員会 生涯学習課文化財振興班
鹿角市先人顕彰館
國學院大學研究開発推進機構
國學院大學博物館
成城大学民俗学研究所
千葉県立中央図書館
千葉県立房総のむら
天理大学附属天理図書館
遠野市立博物館
利根町立歴史民俗資料館
成田市立図書館
福崎町立柳田國男・松岡家記念館

収蔵資料解説書
「民俗学の父・柳田國男－本から読み解く 暮らしへのまなざし－」

編集・発行
千葉県立中央博物館
〒260-8682 千葉県千葉市中央区青葉町955－2

発行日
令和8年(2026)3月31日

千葉県立中央博物館
NATURAL HISTORY MUSEUM AND INSTITUTE, CHIBA

表紙写真
昭和 16 年 遠山小学校講堂前にて（現・成田市）
中央・帽子の人物が柳田國男　　個人蔵